

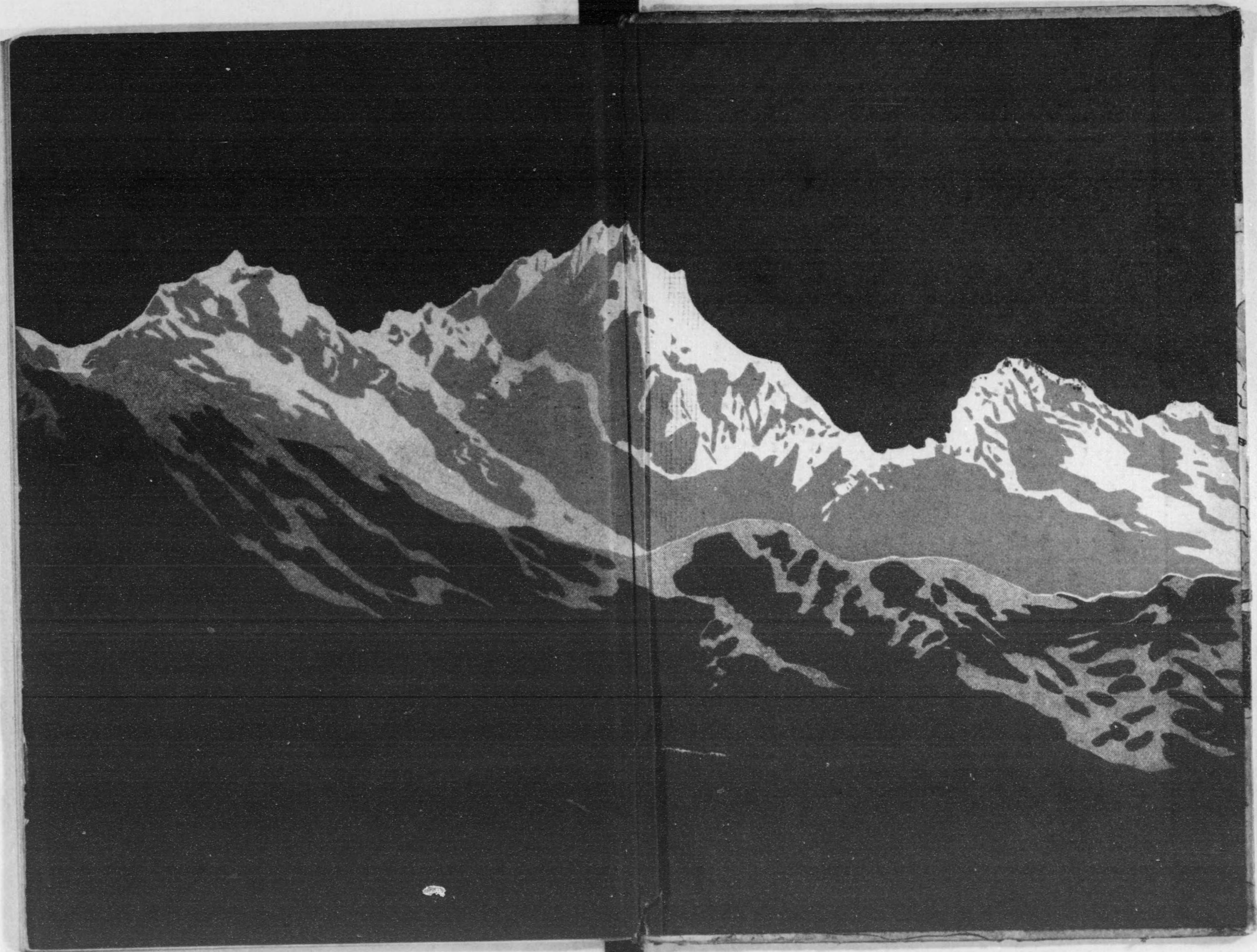


325  
406



始





松浦百英著



法王繪  
釋尊

八御傳記

大正  
5. 5. 8  
内交

東京 佛教館發行

序

人類の歴史ありてより以來、世界宗教史上  
其の教祖を以て直に本尊とせしものは唯  
法王釋尊を措いて他に其例證無しとす。其  
の然る所以のものは何ぞや、是れ斷智恩と  
主師親の三徳に於いて圓滿完備したまへ  
るに由りてなり。他の諸宗教は皆其の教祖

以外に何物か偉大の力を有するものあり  
と假定し、夫れに向つて信仰を力説するに  
過ぎず。夫れ然り人智未開の時代に在りて  
は、其れにて満足し來りたれど人文開明の  
現代となりては、其の人爲的假定本尊の權  
威を維持せしむること、甚だ以て覺束なし  
とせざるを得ざるに至れり。

而して現代の人心に適合すべき權威ある  
宗教の本尊は何ぞや、其は人類中に於いて  
最高無比なる歴史を有する、教祖にして即  
ち本尊、本尊にして即ち教祖なる大聖釋迦  
牟尼佛を以て、人類向上の理想とせざる可  
らず。此佛陀は降誕の初め獅子吼して曰く  
「天上天下唯我獨尊」と、又成道の後四十餘年

を経て出世の本懐を述べたまふに當り、今  
此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子、而今此  
處多諸患難、唯我一人能爲救護と宣言した  
まへり。然れば此三界四生の中此無等等な  
る大人格を措いて、他に信仰の對象とす可  
きもの有らざるなり。  
然り而して此大聖法王は、小乘淺見の眼よ

りするも、果滿圓極の新佛に在しまして、其  
佛格に些の缺損ある無し。又大乘深高の識  
よりするも久遠實成の古佛に在しまして、  
五濁の我等を救濟せむがため、假に八相を  
示現したまへるを見る。然れば久しく法王  
の無礙光に照觸せらるゝもの、云何ぞ八相  
の順序を知らずして可ならむや。爾り其佛

傳の種類尠ならずと雖も、其長短を折衷し、時文を以て平易に編述したるもの無きを遺憾とせり。

是れに由て余は自から古今の史實を精査し、佛意の存する所を観察して、比較的完全なる實傳を世に紹介せむと念ふこと切なりしも、既往二十餘年間劇忙なる文書傳道

に全力を注ぎしを以て、此一大長篇の述作に従事するの暇無かりしを憾みとす。

然るに余と多年異體同心なる、道友百英師あり。師素より口舌布教のため、南船北馬して閑日あらずと雖も、其間黽勉努力し、余に代りて本傳の大成を告げられたり。嗟乎其功や大なり、余の歡悅何物か之れに過ぎむ。輒ち之を印刷に附して不朽に傳へ、廣く天

下に宣布せむとするに膺り、御一代の繪畫  
なくしては其興味深からざるに由り、特に  
龍涯畫伯に乞ひ、殆ど其真相に近きしもの  
を書中に挿入し、自ら出版を管理し校正を  
嚴密にして、遂に之を公刊するに至りしは、  
眞に余が衷心の欣榮とする所なり。

維時大正五年丙辰大聖降誕日

法王子 高田道見謹識

(八の序)

## 自序

大悲照鑒の下に本書が佛降誕の聖日を以  
て發行せらるゝは、予の衷心より感激措く  
能はざる所なり。由來佛傳に關する著書は  
東西を通じて數十種を下らず。南傳北傳の  
差あり。大乘小乗の別あり。或者は人文史上  
より印度の地理風俗習慣等の背景を描出

(九の序)



し、偉人としての史的事實を考究明せむ  
ことを努め。或者は宗教上の思想を顯はさ  
むがために徒らに超自然的奇跡を羅列し  
て荒誕誇大に失するあり。是れ等は皆熱誠  
熾烈なる宗教的欲望を具體化したるもの  
にして、其根柢には意義あり精神あり、各各  
大聖法王の一面を描けるにあらざるはな

し。然りと雖も佛陀を以て單に偉人と稱し  
奉るは則ち當らず、佛陀の説法教化は人と  
しての範疇を超越し給へばなり。又猥りに  
神怪不可思議の説話のみを以つて傳へむ  
とするも亦當らず、佛陀の出處事蹟は人類  
史上に埋没すべからざるものあればなり。  
是の如く一邊に偏する説述を以て、吾等の

本師本尊として信仰の標準とせる法王如  
來の清淨身を描けるものといふべからず。  
經に曰く衆生既に信伏し質直にして意柔  
軟に、一心に佛を見むと欲して自ら身命を  
惜まざれば、時に我れ及び衆僧俱に靈鷲山  
に出づと、眞個に如來の淨法身を見奉るは  
感應道交の正當恁麼時ならざるべからず。

(二一の序)

予謏劣菲才自ら揣らず、幸に法王子老師の  
指導提撕を仰ぎ、竊に心を用ひて普く佛傳  
に關する諸經論を参照し、歴史上の事蹟を  
離れずして信仰と合致したる聖傳を叙述  
し、龍涯畫伯の彩筆を借り來りて、佛陀一  
代の聖蹟を紙上に髣髴たらしむることを得  
むとす。

(三一の序)

本書出版に際し、實地に佛蹟を參拜精査せられたる笠間修文師特に修正の勞を執られ、英雲外師編纂校閲を擔任せられたるを深く謝する所なり。

大正五年四月八日

松浦百英謹識

(四一の序)

# 法王繪入御傳記目次

## 第一章 常編

第一節 釋尊出世の因縁と當時の印度國情	一
第二節 釋種の系統と淨飯大王	七
第三節 兜率天より降胎	一三
第四節 四月八日の藍毘尼園	一九
第五節 阿私陀仙人太子の瑞相を豫言す	二五
第六節 悉多太子の學藝修養	三一
第七節 一門の王族と武藝の競争	三七
第八節 城外閻浮樹下の冥想	四三

第九節 耶輸多羅女の入内……………四九

第十節 太子四門の出遊……………五五

第十一節 太子出家の決心……………六三

第二章 樂篇

第一節 太子の入山學道……………六九

第二節 跋伽仙人と對談……………七七

第三節 車匿遺物を奉じて還城……………八五

第四節 王舍城の途上頻婆娑羅王と對話……………九一

第五節 阿羅邏仙人と對談……………九九

第六節 正覺山中の苦行……………一〇五

第七節 菩提樹下の端坐……………一一一

第八節 金剛座上の降魔……………一一七

第九節 臘月八日の成道……………一二三

第三章 我篇

第一節 本願方便の應世……………一二九

第二節 鹿野苑の初說法と三寶現前……………一三五

第三節 耶舍一族の歸佛と五十羅漢の宣敎……………一四三

第四節 三迦葉兄弟の歸佛……………一五三

第五節 竹林精舎の造營……………一六一

第六節 舍利弗目連大迦葉の歸佛……………一六九

第七節 淨飯大王と再會……………一七九

第八節 羅睺羅と難陀の出家……………一八七

第九節 提婆優婆離等の出家……………一九五

第十節 祇園精舎の造營……………二〇一

第四章 淨 篇

第一節 淨飯大王の崩御……………二一一

第二節 摩訶波闍波提女等の出家……………二一九

第三節 賓頭盧尊者の因縁……………二二七

第四節 忉利天上の説法……………二二三

第五節 外道惡人の化導と阿難の隨侍……………二四一

第六節 提婆達多の因縁……………二五一

第七節 阿闍世王の歸佛……………二五九

第八節 捺女と離車との教化……………二六七

第九節 世尊の病惱と舍利弗目連の入滅……………二七一

第十節 純陀最後の供養を捧ぐ……………二八三

第十一節 二月十五日夜の拘尸那城……………二九一

第十二節 須跋陀羅の證果……………二九九

第十三節 娑羅林中最後の教誨……………三〇七

第十四節 世尊の遺身舍利を頒つ……………三一七

附 録

御一代年譜

釋種の系譜

三聖樹の寫眞(コロタイプ版)

目次  
佛陀伽耶大塔の沿革及び三聖樹の解

目次

六

法王釋尊繪入御傳記目次(畢)

法王釋尊繪入御傳記

松浦百英述

第一章 常編

第一節 釋尊出世の因縁と印度當時の國情

大聖釋尊の御傳記に就いては、之を教理的信仰の上から拜すると歴史的事實に據りて叙述すると、二通りの見方がありまして、信仰の上から演べたものを、歴史眼を以て見ますと、虚中に實を含み、實中に虚を混じて、荒誕無稽雲煙を模搦する様な感が生ずるであらうし、また、歴史的事實の考證に據りて、冷かに批評して叙述したものを、信仰の眼を以て眺めたなら

第一節 釋尊出世の因縁と印度當時の國情

一

ば、乾燥無味にして蠟を嚼むが如く、何等の價値もないものとなつて了ら  
 でありませう。私は元來教理上に於いて、久遠實成三身一體の法王を信仰  
 して、その上に歴史的事實を考へて居る者でありますから、御傳の中には  
 如何に神怪靈異の事蹟がありましても、決してこれを荒誕とも無稽とも  
 考へません、そこに甚深廣大なる意味が存するものと思つて、最も有難く  
 之を味ふ者であります。

凡そ何事でも、流行と必要との別があります。流行とは言ふまでもなく  
 一時的のもの、必要とは無くてならぬ當然のことである。日用の衣類で言  
 つても、縞柄とか模様とか、または髪結びの様まで流行を逐うて人に後れ  
 まいとするのが流行といふもの、必要と言へば、夏になれば單物を着ねば  
 ならず、冬になると綿入を用ゐなければならず、また、腹が減けば御飯を喫  
 べねばならぬやうなものであります。宗教と云ふものは、一時的の流行で

なくて、人生に於て、當に無くてはならぬ必須の條件であります。人心の最  
 奥に根ざすところの微妙の力が、必要に應じてあらはれたのであります。  
 我が大聖世尊が出現あらせられたのは、此人生必須の要求に促され、如何  
 しても出現し給はなければならぬ時節因縁が到來して居たからであつ  
 たのです。而して如來様はこの娑婆世界に出現遊ばされ、三世通貫の智眼  
 と十方無礙の金口とを以て古今に冠絶せる無上の大道を顯示せられま  
 した。その當時に於ける印度の狀況を見たならば、大聖の出現が如何に痛  
 切であつたかといふことが解るのであります。

北の方には峨々たるヒマラヤ山の巔峰が、千古の雪を戴いて霄漢に聳  
 えて居る。南の方へ幾多の川流が滾々として恒河に朝宗し、其灌漑する地  
 域は四千餘里の間、土地は平垣にして地味豊饒、田園遠く開けて、壯大華麗  
 なる宮殿は巍然として到る所に聳えて居る。また綠翠鬱葱たる間には婆

羅門の寺塔が點々として建てられて居る。拘薩羅國の波斯匿王は舍衛城に都を定め、摩訶陀國の頻婆娑羅王は王舍城に都し、跋蹉國の優填王は拘跋彌城に、阿槃提國の波羅殊提王は憍禪城にと各其領域を統治し、互に其の隙を伺ひ一旦緩急あらば呑噬の手を延べやうと志して居たのであつた。

大聖釋尊が降誕あらせられた迦毘羅衛城と云ふのは此等の大國の間に介在した種姓尊貴の一國でありました。その頃は政治上のことは言ふも更なり、宗教上乃至は社會の出來事に至る迄、總て階級に依つて支配されて居たものです。所謂四姓の差別があつて、婆羅門族は最高の階級に居つて神を祀り、宗教上の權を握り、兼て政治上の指導までも自ら任じて居た。刹帝利族は是に次いで兵政の權を司り、毘舍族は農商を業とし、首圖羅族は最下級にあつて、三族の奴隸となつて居たのである。この四姓の中に

於いても婆羅門族は最優等の地位を占め、一切宗教上の儀式を統轄するばかりで無く、王族なる刹帝利を壓伏して遂に頑固なる神政の組織を爲し、摩奴の法典を作り、己れの種族は神聖にして犯すべからざるものなりと云ひ、法典の中に婆羅門は造物主なり、責罰者なり、教導者なり、慈惠者なり、婆羅門に對しては、如何なる人も不祥なることを言ふべからず、又苛酷なる語を用ふべからず」とか、假令草の葉を以てするも、婆羅門を打ちたるもの、布片を以て婆羅門の頭を縛りしもの、若しくは爭論に於いて婆羅門に勝ちたるものは、平伏して寛假を請はざるべからずなど、絶大なる勢力を揮うて居る様な狀況で、弊害百出、不正の壓制に怨を吞んで死する様な事例は數へ切る事も出來ぬ。隨つて同族内の競争や腐敗は其極度に達し、最早何等かの道を取つて、社會の革新を成すべき秋に際會した。波羅門僧徒腐敗の結果として、眞面目なる刹帝利や比較的賢明なる婆羅門等は



熱心に宗教問題の研究を始め出す事となり、數多の哲學者達は各々異種の學說を唱道して互に論難し、空論派もあれば裸形派もあり、勝論數論聲論、順世學派、瑜伽學派と云つた様に、九十五種の外道は、紛然雜然として天下に蜂起し、何れが正何れが邪なるや、宗教の信仰を求むる者は其歸着する所を知らざるに立ち至つたのであつた。是に於いて當時の印度民族は、この横暴と繁雜なる社會の階級を脱し、煩瑣なる學說を統一し、腐敗墮落の底に沈める宗教界を革正する、大聖人の出現を渴仰して止まなかつた。

此の時に方つて、我が大聖釋尊は、迦毘羅衛城釋種の王子として出現せしまし、人心を一洗し、社會を改造すべき宗教を唱道し、四河海に入つて本名なく、四姓出家して同く釋子と稱すと、一視同仁の度量を以て無上の妙法を説き出だされたものであるから、教勢は疾風迅雷の勢を以つて期せずして五天を風靡するに至つたのであります。





第二節 釋種の系統と淨飯大王

世尊が降誕遊ばされた迦毘羅衛城淨飯大王の系譜を糺して見ると、甘蔗または日種と稱するのであります。今其由來を御話すると過去に大茅草王といふ聖王があつて、世々褒多城に住して人民を治化して居られました。最後の大茅草王が年老いて世子もないので、政を諸大臣に委せ、王位を棄て、鬚髪を剃り、出家して山林に入り、王仙と號し、持戒清淨専心勇猛に修行して、遂に四禪定を成就し、五神通を具足せられました。が、次第に老衰して其の體は衰へ肉は落ちて、最早歩行することも出来なくなつたので、王仙の弟子達が行乞に出懸ける時、若しも脚腰の立たぬ王仙が毒虫や猛獸などに害せられてはならぬと心配して、軟かな草を籠の底に敷き、その中に王仙を容れて樹の枝に懸けて置いたのであつた。すると其日こ

の山に獲物をあさつて居た一人の獵師が、遂に樹の枝の王仙を見て、あやまつて弓を張り箭を放つてこれを射た。王仙は籠の中で遂に絶命したのであつたが、傷口から滴る血汐が二線に分れて地に落ちた。弟子等は食を乞うて山林に歸り、血汐の滴るのを見て大に驚き籠を卸して見ると、王仙は何物にか射殺されて居る。止むなく死骸を淨地に運び、柴を集めて茶毘に附し、骨を拾うて塔に納め香華を手向けて供養しました。然るに彼の血汐の滴つた兩方の地から、二本の甘蔗が芽を生じ、漸々に日に照されて生長すると、其の一莖よりは一人の童子を生じ、又一莖よりは一人の童女を生じたのである。共に端正微妙にして世に雙びなき程であつた。

時に弟子等は念ふやう、王仙は世に在る時一人の兒女だも無かつたのである。今この兩童こそは正しく王種であると、互に愛護養育して之を諸臣に告げ知らせた。諸大臣は喜び迎へて王宮に奉じ、解相の婆羅門を召喚

して、二童子の形相を占ひ、並に其名を作らしめた。相師が云ひますには、この童子は尊貴の徳相がある、日炙の熟するに因り甘蔗が開けて出生したのであるから善生と名け、又は甘蔗生と名け、日種と名けるが宜しい、彼の童女の因縁も同様であるから、善賢と名くるが宜いと、それから諸臣はこの甘蔗種所生の童子を尊び、灌頂の式を行つて王と爲し、善賢女を拜して王の第一妃と爲し、更に他より第二の妃を入れたのであつた。後第一の妃なる善賢は一子を生み、その名を長壽といひ、第二の妃は四子を生み、一を炬面二を金色三を象衆四を別成といひ、何れも聰明神武にして勇猛であつた。然るに善賢妃の生むところの子は、容貌は端正美麗であつたが、文武の徳相に於て缺けたる處がある。諸臣はこれを評して到底大業を繼承するに堪へずと言つた。けれども善賢は如何にもして我が子に王位を繼がしめやうと思ひ、甘蔗王に乞うて第二妃の生む所の四子を國外に擯出せ

んことを追つた。甘蔗王も事情止むことを得ませんので、罪なき四子を褒  
 多那城から逐ひ出して、了つた。その時四王子の生母を始め諸妃、臣僚、兵將  
 軍士、醫師、合藥師、其他工匠師、奴婢、僕使に至るまで、大王に乞ひ求めて四王  
 子に隨ひ、四王子は此等の者と共に、多くの資財、諸道具を載せたる馱馬を  
 率ゐて、雪山の麓に向ひ、婆耆羅夷河を渡り、樹木の生ひ茂りたる舍夷とい  
 ふ林中に來ると、この林中に修行して居た迦毘羅といふ淨持梵行の仙人  
 が、この勝地を四王子に譲つて他に去つて了つた。

それから四王子は眷屬と共に、漸々四方を平け、他の種族や土人を服従  
 せしめて、遂に城廓を築き、迦毘羅と名け、民を治むるに徳を以てし、人を教  
 ふるに道を以てしたから、萬民が悦服して、父母に歸するが如く、四方より  
 集り來るもの踵を接し、數年ならずして、人口増殖したので、遂に國家を建  
 て、王城の名に基き、迦毘羅國と名け、遠近に雙びなき一大強國と言はるゝ

やうに成つた。同じ王族が二つに別れまして、一は迦毘羅城の東、ロヒニ河を  
 渡つて、拘利に城を築き、河西は迦羅毘城、河東は拘利城、この兩王族が互に  
 相結婚する事になつた。

時に甘蔗王善生は先に擯出した四王子のことを思ひ出し、これを見ん  
 として、使を遣はしたが、四王子は辭して歸りません。善生王は、四王子が雪  
 山の南東の地を平定し、仁徳を以て、普く萬民を治め、一強國を成して居る  
 ことを聞き、我が子が徳を以て能く人を統治する大能あることを知り、之  
 を讚歎して、我が子は釋迦なりと言つて、能仁の徳を褒めました。この因縁  
 から、其一族を釋迦族といつたのであります。

その後、迦毘羅城主、閼那犀那に一男一女があつて、男を獅子頰といひ、女  
 を那輸陀羅といつた。拘利城主は提婆陀訶に一男一女があつて、男を阿菟  
 釋迦といひ、女を建遮那といつた。獅子頰は拘利城の建遮那と結婚して七

子を生み、阿毘釋迦は迦毘羅城の耶輸陀羅と結婚して一男三女を生みま  
 した。獅子頰の長子が淨飯王次は白飯王次は斛飯王次は甘露飯王である。  
 其次に三人の女子がある。阿毘釋迦の長子は善覺といひ、長女は檀陀波賦、  
 次女は摩訶摩耶、三女は波閣波提といつた。淨飯太子は智徳兼備にして武  
 勇も雙びなかつた。その頃邊地に半拏縛と云ふ者が兵を起して他の領土  
 を劫奪し、勢力強大で、已に迦毘羅城近くまで攻め寄せる事になつた。淨飯  
 太子は兵に將として之を討伐し遂に逆徒を打ち平げて凱旋せられた。其  
 の後太子は拘利城の摩訶摩耶、破閣波提の二女を迎へて后妃と爲し、父王  
 崩御の後王位を紹いで仁政を施し、國家安穩にして萬民太平を歌ひまし  
 た。淨飯王家の血統は當時五天竺の間にも比類が無いほど優越清淨の系  
 統であつた。如來は先づ其降生に先つて南閻浮提の中に於て淨飯王家こ  
 そは尤も理想的王族であると觀察遊された。



第三節 兜率天より降胎

大聖世尊が此娑婆世界に降生遊ばされぬ已前は補處の菩薩と云ふ御位で兜率天上に御住居遊ばされて居たのである。今や機縁漸く熟して此の人間界へ御降り遊ばされんとて、先づ五事を觀せられた。五事といふのは一には諸の衆生の熟と未熟とを觀じ、二には時の到ると到らざるとを觀じ、三には諸の國土の中に何れの國が中央に處するやを觀じ、四には諸の種族の中に何れの種族が最も尊貴なるやを觀じ、五には過去の因縁誰か最も我が父母となるに堪へたるやを觀じ、自ら思惟し給ふ様第一には今諸の衆生は皆是れ我が發心以來因縁成熟するものである、二には天宮を下りて我が説く所の清淨の妙法を受くるに堪ふるの時期は既に來つて居る、三にはこの三千大千世界に於いて南閻浮提迦毘羅衛城が

最も中央に位する、四に諸族種姓の中でも、釋迦氏は甘蔗の苗裔、聖王の後胤にして、最も尊貴である、五に迦毘羅城主淨飯大王、聖后摩耶夫人は心相諸根共に具足して、過去の因縁も神厚であるから、今神を降して、父母となすに堪へたり、當に甘蔗王の苗裔なる釋迦種族淨飯大王の家に下生し、父母を離れ、妻子を棄て、出家學道し、魔怨を降伏して、一切種智を成じ、過去の諸佛の所行の法式に依り、大法輪を轉じて、廣く無量の衆生を濟度せんと觀念せられたのでありました

この時迦毘羅城中の淨飯王妃摩耶夫人は、或る夜の御夢に、忽ち虚空に音樂を奏する者があるので、夫人は思はず枕を擡げ、是を御覽になり、すと空中には紫雲飄蕪としてたなびき、その丈は凡そ十六丈許なる金色の寶塔が雲の中に聳え、其周圍には黄金の幡八流、七寶の寶樹が八本、また微妙の華が美事に咲き出で、居る夫人は奇特の有様を不思議さうに御覽

遊ばされると、見る／＼中に其の英が開いて花の中から無量の佛が出現し、合掌して微妙の音聲を發し、同音に拜戴尊嘉、十方最勝佛無上覺哉、光明無量尊、衆生智願皆満足、三身圓滿皆成就と唱へながら、その寶塔を禮拜せられると、不思議なるかな寶塔四面の扉が自然と開き、赫々たる大日輪の光の内に金色の御佛が端坐合掌して、妙なる御聲を發して、我得成道久遠劫平等衆生一子地、智願満足今現在、到來結緣諸佛智と唱へられました。すると、いづくよりともなく忽ち六牙の白象が青蓮花を頂いて佛前に顯はれ、御佛は寶塔の中より出でて蓮花の上に移り坐し給ひ、御額の白毫の光明は十方を照し、其光が摩耶夫人の頂に映じました。夫人は心神清く爽かなること限りなく、そゝろに隨喜の涙を流して、恭敬禮拜せられました。其の時佛の御聲も朗かに如何に夫人よ、われ宿世の因縁深きにより、今此所に來り、淨飯大王を父と憑み、御身を母と頼んで塵土に出生し、魔縁を降伏

して一切種智を成就し、廣く諸天人衆を利益せんとす願くは夫人しばらく胎内を貸たまへと聽えましたので、夫人は大いに驚き、それは恐れ多きことである。もとより五障三毒の罪深く、不淨染汚の女の身に、争で尊き御佛を胎内に宿し奉るべき、その義は恕しおはしませと辭退ありましたが、佛は夫人過去の宿殖を説き、多くの經文を書寫せし功德深く、六根清淨の徳を具へて、日月の光を汚さず、六色の障りなき身となれり。今御身の胎内を借るべきに、さのみ辭みたまふことなかれと説きたまひ。摩耶夫人は佛言を聞いて、感涙に咽びながら猶も辭し奉らんと、雙手を合はせられた時、不思議なるかな夫人の掌の裡から、二十八葉の青蓮花が生ひ出でた。その時、御佛は白象の背を離れて、夫人の掌中の蓮花に乗り移らせたまひ、微妙の御聲を發し、我得成道今現在往來娑婆八千度、爲度衆生常說法、已今當來諸佛智と唱へ、珊瑚の乳房をかきわけ、右の脇より影の如くに胎内に入ら

せられた。夫人は打ち驚き、これはそも恐れ多きことにこそと、我が身を抱けば五體六根清らかに盆中に白玉を裹むが如く、胎内より明らけき光明輝き、夫人は廓然として佛の説きたまひし因位の昔語も疑ひなき實事である。と御悟りになり、我ながら不思議にも有がたきことかなと感歎いたされた。

其時大地六種に震動して、涇河沙の菩薩諸天は各々來現し、戴禮佛母、除難守護諸佛證誠と、同音に唱へ、夫人を禮拜せられました。夫人は大いに駭き、これは勿體なしと恐れをなして拜せんとせられたとき、忽然として夢は覺めたのである。

その翌朝に至り、夫人は淨飯大王に對面せられると、大王つくくと夫人の顔を打ち見やり、今御身の容貌を見るに、平日と異にして、眞に天人の如し、何事か不思議の靈感はあらざるかと尋ねられました。夫人も包むこ



となく夢想の始終を御物語りになり、大王も深く歡喜して、これ諸天我に太子を授け給ふに疑ひなしと叡感あり、觀相の婆羅門を招請し、妙香花種々の飲食等の供養を營み、夫人の右脇入胎のことを示し、並に種々の瑞相を説き、婆羅門に向つて願くば爲にこれを占へ何等の異なることかあるやと申されました。婆羅門はこれを占ひ謹んで奏するやう、大王よ夫人の妊みたまふ所の太子は諸善妙相悉く具はり給ふ、夫人胎内の子は必ず能く釋迦種族を光顯し、名聲遠近に震はん、他日降誕ある時は、諸天釋梵執持圍繞するならん、是れこそ正覺の瑞相と申すもの、若し出家せられずば、轉輪聖王となつて、四天下に王として臨みたまはん、能く保護を加へ給へと奏上致しました。夫人は起居輕利にして人間の味着を求められず、日夜に六度の善根を勤修する事を喜ばれ、城中にも種々の瑞相が現はれて、病者は癒え、三毒は除かれ、光明と悅樂との氣が内外に充ち亘りました。





第四節 四月八日の藍毘尼園

聖子降誕の瑞相として城中は歡喜悅樂の聲に充ち、此の世乍らも天上  
 界の樂苑かと思はれる様であつた時しも陽春四月の頃花笑ひ鳥歌ふの  
 好季節となりましたので、夫人は大王に向つて藍毘尼園に遊覽せんこと  
 を申出でられると、大王も之を御歡びになつて、彼の苑中の殿舎を莊嚴し、  
 幢幡を立て繪蓋を懸け、流泉浴池等をも清潔にして、翡翠鴛鴦鸞鳳鳧雁異  
 類の衆鳥を其中に放ち、専ら御幸の御慰めに供せられた程なく其月の八  
 日となりましたので、園内には數百の美女、老いず幼なからず、才智勝れた  
 者を選んで五色の衣を着せ、これを歡待の給士となし、その外數百の美麗  
 なる童女を撰み、年齢も齊しく、身の丈も長短なきもの數百人に、瓔珞彩衣  
 を着せて、香華を執らしめ、道路は四軍を辨督して嚴重に之を警衛せしめ、

第四節 四月八日の藍毘尼園

摩耶夫人は簪には八色の絲を以て七種の英を造り、寶冠には七寶の瑤珞を結び、羅綾の御衣の上には花鳥を繡せし、纈纈の袿を重ね、丈なす髻は瑠璃を伸べ、宛轉たる黛は遠山の霞、青蓮の眸は傾國の色、將に是れ白雪芙蓉の花の色、露を帯ぶる有様、諸の官屬采女等に前後を擁せられ、玉輦漸く藍毘尼園に入らせれました。忽ちに園林は廣博となり、池の面には芙蓉を生じ、天龍夜叉合掌して讚歎すれば、諸の天女は華を捧げて恭敬し、後園の樹木は自然に果を生じ、名香薫じて、徧く遠近に布き、或は雪山より五百の白獅子城門に來り、或は諸の玉女金瓶に甘露を盛りて、空中に住し、毒蟲去りて、好魚來り、惡獸隠れて、吉鳥顯はれ、諸の瑞相は悉く地上に顯はれました。摩耶夫人は玉牀を起ち、徐かに無憂樹の下に立ち、寄られますると、不思議やこの時、虚空より金色の光を放ち、二流の旗天降つて、無憂樹の梢に翻へり、靈香四方に薫じて、苑中の草木瓦礫も金色の光明に輝きました。時に

夫人が右の玉臂を御伸しになると、花枝は自ら屈み、垂れて御手近くなびき下り、夫人が花枝を牽いて摘らんとせられました。太子は其の時に忽然として夫人の右脇より出生せられました。時に樹下には忽ち車輪の様な七莖の寶蓮華を生じ、太子その蓮華臺に立ち給へば、今まで二流の旛と見え、たのは忽ちに難陀龍王、優婆難陀龍王、金色二體の龍神と現じ、八色の光を放つて、虚空に飛揚し、清淨功德水を雨らし、温ならず、涼ならず、太子の頂より四肢にいたるまで、洗浴して、諸の不淨を洗ひ流しました。釋提桓因は手に寶蓋を把り、大梵天王は白拂を以て左右に侍し、空中には四天王及び無數の諸天、妙華を散じ、伎樂を奏し、名香を焚き、瓔珞を雨らし、一同に太子を敬禮して、合掌した。たゞ第六天の魔王あらはれて、今より永く我が道衰滅するならんと、懊惱悲泣したと云ふ事です。

太子は周行七歩して、右手を擧げて天を指し、左手を垂れて地を指し、天上天下唯我獨尊、三界皆苦、我當安之と獅子吼あそばされたと云ふこと、これには元より種々の異説もあるが、今は過去現在因果經や佛說太子瑞應經に據つて、一代を始終せる高き性格と、絶大無比の御事蹟を、佛陀自身の御口によりて始めて宣言あらせられたることと信ずるのである。正法の現成するところには邪法は影を没す、佛陀の御出世あるとき、惡魔の威を揮ふ譯はない。今大聖の御降誕によつて、世界は限なく救はれる事となつたのです。その靈蹟奇瑞は到底筆舌の盡すところではない。

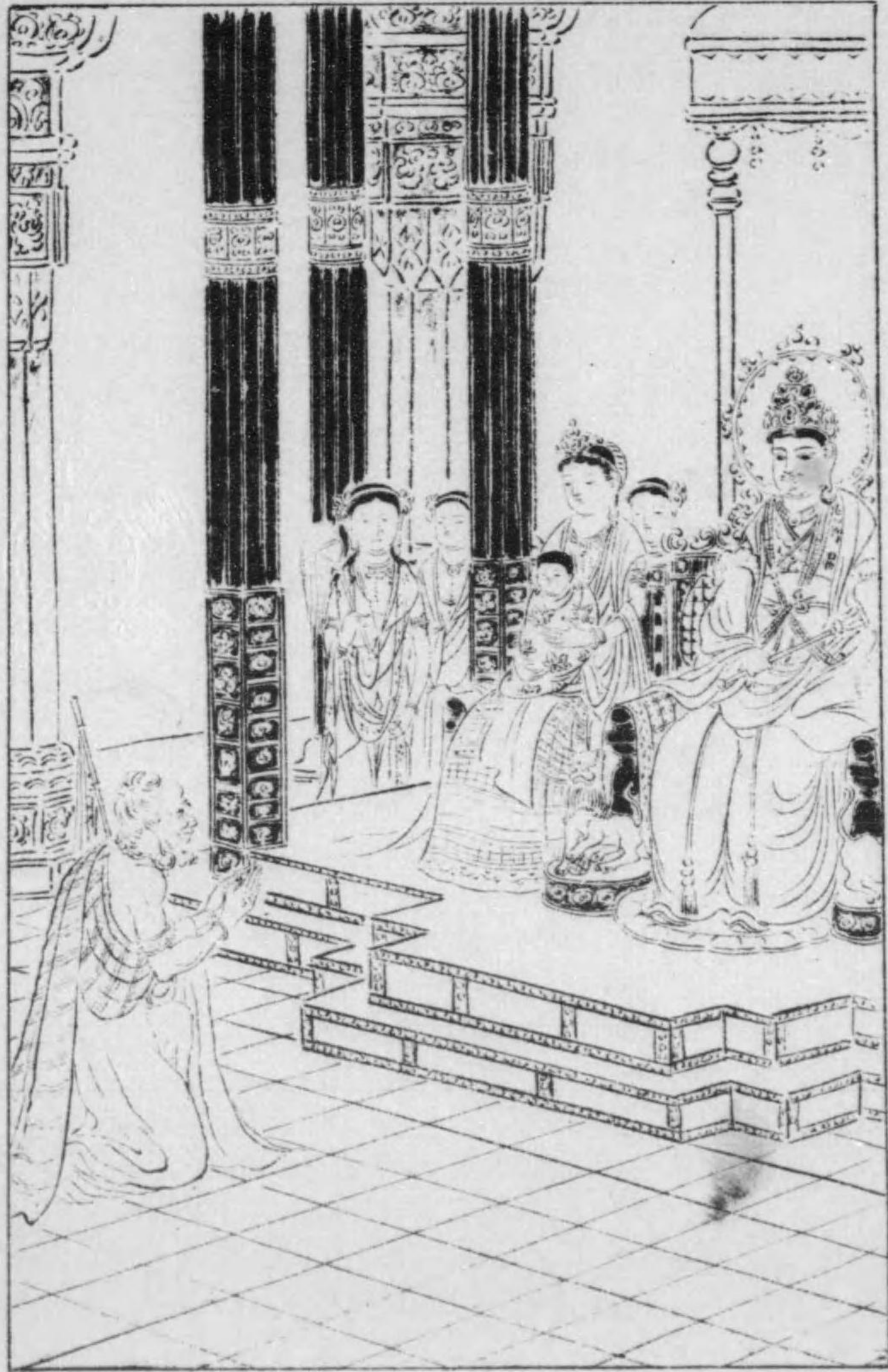
斯くて太子降誕のこと、その容顏端正にして種々の徳相を具へらるゝこと、靈妙なる奇特吉瑞のありしことを具に大王に奏上しました。大王もこの前代未聞の奇特靈瑞を聞き、一度は喜び一度は懼れ、潜在生兒の將來と王國の運命とを氣遣ひながら、先づ親臣官屬及び四兵を遣はし、太子を

宮殿に迎へ、後宮采女と共に宮中に還られました。

大王は直に使を遣はして諸の婆羅門を招き請して種々の寶物を布施し、太子を抱いて婆羅門に向ひ、今この太子には當に何の名を呼ぶべきであらうか、爲めに名を擇まれよと仰せになりました。諸の婆羅門は相共に論議して答ふるには、太子生るゝ時、一切の寶藏皆悉く發出し、あらゆる靈瑞吉祥至らざることなし、宜しく薩婆悉達多と名くべしと申し上げた。(悉達多は古來譯して財吉といひ、頓吉といひ、また成利といふ、何れも其語原より考ふれば、目的成就一切義成就の義となる)この名を安じ奉りました。時天人共に讚歎して其の吉祥の御名を祝福致しました。其によつて太子の御名を悉多太子と申上げる事になつたのです。

佛降誕の年月日に關しては、古來種々の異同がある。經文の上には二月八日(長阿含經佛本行集經)二月十五日(佛涅槃經)とあるなどは頗るかけ離

れた違ひ方である。併し乍ら修行本起經や佛所行讚などには明に四月八日とありますから之を取つて佛降誕の聖日と定めたものと思はれます。歴代三寶記の説によりますと印度の四月八日は周の二月であると思はれて居る。又僧史略や二教論には事細かに印度の四月八日が周曆の二月八日で晋の二月五日魯の二月七日と云つた様に説かれてあります。曆推定の不完全であつた古代の記録はあまり當には成り兼ねると思はれます。要するに陽春四月中和の候花笑ひ鳥囀ずる理想的氣節を撰んで降誕あらせられたと云ふ事も萬徳圓滿の佛徳が顯現した一端に外ならぬと拜されます。





第五節 阿私陀仙人太子の瑞相を預言す

迦毘羅衛城に降誕あらせられた太子の周圍には、才辯高德で其名も高  
 い知相の婆羅門が、威儀堂々と居並んで、相好を占ひ吉凶を判し、各々太子  
 の最尊無上に在しますとを驚歎した。今つらく太子を見奉るに、瑞嚴の  
 妙相、人天の奇特を具へ給ふ。若し出家せられたならば、一切種智を成じて  
 三界の獨尊一切衆生の導師と仰がれ、また家に在せば、轉輪聖王となりて  
 四天下を領じたまはん。衆流の中には海を以て第一となし、群山の中に  
 は須彌最も勝れたり。諸の光輝は日を無上と爲し、一切の清涼は月を最と  
 爲す。人天の中に於ては太子こそその師表と仰がれ給ふ。御身であると稱  
 讚の辭を奏聞致しました。淨飯大王は是を聽かれて限りなく御悦びにな  
 り、百官庶僚悉く萬歳を唱へて祝し合ひました。

この時一人の婆羅門進み出で大王に對つて申すやう、こゝに維那里國香山といへる深山に、足は地を踏まずして眼を千里に回らし、名を呼ばば即ち險山大川に身を礙へられずして來る神通自在の阿私陀と申す賢仙がある。この仙人こそは能く太子を占相して王のために疑惑を斷ずることを得ると言上いたしましたが、大王も香山といへば道路峻峻にして往くこと容易ならず、誰をか勅使に遣はすべきやと、靜かに思惟して居られると、阿私陀仙の方では諸種の瑞相と諸天の歌にて、人天教主の降生があつたことを知り、神通を以て迦毘羅城の門に至りました。守門の監卒がこれを見て、怪んで其名を問ひますと、我は大王が招き給ふの意あるを知りて來れる阿私陀なりと答へた。大王は且つ驚き且つ悦び、百官に命じて出で迎へ、殿上に請して對面せられ、仙人の風彩を御覽じ遊ばされると、面は熱せる棗のごとく、兩の眼は星よりも明かに、鬚髮悉く紫にて、殆ど塵圓を脱し

た趣きがある。大王は深く尊敬して其來意を謝し、太子を召して仙人を禮拜せしめやうとせられました。仙人はこれを抑留め、太子は是れ三界中の至尊である、何ぞ吾を拜せしむるの理あらんやとて、自ら立つて合掌し、太子の御足を禮して讚歎し、この君は實に三十二相を具足し給へりと申しました。

仙人は太子を見ること、稍久しく恍然として前後を失つた様でありました。が、忽ちにばらくと涙を流し、聲を放つて太子の脚下に泣き伏しました。大王は其を見て驚き座を起ちて、仙人の前に稽首して問はるゝには、我が子は生るゝ時にも種々の瑞相があつた。いま何の不祥があつてかくの如く泣き悲まれるか、若しこの子が生れて短命であるか、或は命は長くとも何事か國家に禍するの相があるか、我は餘生も長くは無い行くゝ位を太子に譲り、身は山林に閑居して老後の安逸を得度いと思ふ。太子に

若しも不祥の事がある様では、伽毘羅衛一國の前途を如何すべきと、息急  
 き込んで御問ひになりました。阿私陀仙は雙手を擧げて大王の悲歎を制  
 し、歎歎して答へました。大王よ、悲みたまふな。太子は相好具足して一の不  
 祥も無い。この王子こそは、人天三界に並びなき福徳圓滿の相好を具へ、其  
 眼は世界を照すべき慈悲の光に輝き、其顔は天地六合の主たる徴證があ  
 る。必ず御齡二十を出でざるに出家苦行して本願満足阿耨多羅三藐三菩  
 提を成就したまひ、世間群氓のために無上の大道を示し給はん。今この世  
 の相を見れば、出づる息の入るをも待たぬ身なれば、日に向ふ朝露よりも  
 危く、生死不定の命なれば、蜉蝣の夕を待つよりも短し。玉の簾錦の帳も萬  
 歳の粧にあらず、金の臺銀の階も千秋の栖ならず。碧綠紺青の髪も終には  
 塚際の芝に纏ひ、莊嚴柔和の容姿もまた野邊の骸骨と化せん。無始流轉の  
 凡夫煩惱熾盛の悪人、これ等諸々の衆生を愍み給ひ、大法輪を轉じて盡く

濟度せらるゝであらう。然るに我今已に百二十歳の壽を重ね、久しからず  
 して今生の命數を終へん。太子成正覺の時に遇うて、その教化を蒙ること  
 も出来ぬ。我が身の薄運を悲しむの餘り、かくは歎き悲しむのであると答  
 へた。

大王は更に阿私陀仙に向つて問ひ返さる様、尊者よ、嚮に知相の婆羅門  
 が太子の相を見てこの相あるものは必ず二處に越く。二處とは一には家  
 に在らば轉輪王となりて四天を領し、四兵具足正法を以て世を治めて偏  
 枉あるなく、恩天下に及び七寶自ら至り、千子勇健にして能く外敵を伏し  
 兵杖を用ひずして天下太平ならん。若しまた出家せば正覺を成じて十號  
 具足すべしと云つた。尊者は何を以て決定して一切種智を成ずると言は  
 るゝやと詰られました。仙人は答へて我が觀相の法は若し衆生あり、三十  
 二相を具して或は非處に生じ、或は明顯ならざれば此人は轉輪王となる



若し三十二相皆其處を得、又復明顯なれば此人必ず一切種智を成すと云ふ定則がある。我今太子の諸相を見るに三十二大人の相皆其處を得て而も又極めて明顯である。是を以て決定して正覺を成じ給ふを知ると、阿私陀仙はかく説き終つて辭し去りました。

大聖世尊は三祇百劫の修行を満足せられた御果報芽出度、幼時の御相好に於て、既に天上人間に最尊無上の妙相を具足せられました。人間の理想は富貴福德併せ保ち、相好智慧並び具ふるにあるのです。佛陀の御本懷は現身に此の理想を實現し満足せらるゝ事にあつた。流石は一世の崇敬を受けて居た阿私陀仙人丈あつて、能く這般の消息を理解して居たものと思はれます。





第六節 悉多太子の學藝修養

阿私陀仙人の豫言によつて、太子は轉輪聖王たるべき萬徳圓滿の相好を具へ給へる由を傳へ聞いた伽毘羅城中は、歡聲湧くが如く、天下に大赦して獄裡の囚人を解放し、また國中の老人貧者には金錢米穀などを施し、親族群臣へはそれ／＼種々の物を贈與せられました。姪女は錦の如く百官雲の如く、踊躍并舞して互に慶賀の念を顯はして居らぬ者はありませんでした。

清淨の神物を藏した寶器は、更に凡物を容るべき器として用ふる事は出来ぬ。人天三界の大導師たるべき太子を擧げた母后は、藍毘尼園より宮中へ還られましてから、御惱みと云ふ程の事では無いが、何となく御心地例ならず、飲食を斥けて唯昏々として帳中に打ち臥して居られました。宮

中の女官は胸を痛めて時々刻々に容態を奏聞し、淨飯大王も大いに歎慮を惱ませられ、普く名醫を集めて治療の手を盡し、晝夜を捨てず看病看護に盡されましが、その甲斐もなく最早御定業とも申しませうか、太子の降誕から七日目の曉、摩耶夫人は妹君なる波闍波提夫人を枕邊近く御招きあり、自は宿世の戒行いみじくして、大王に幸ひせられまらせ、人々の尊敬世の中の娛樂を極め、太子をさへ産みまひらせた事世にためしなき福分であつた。されど今ははやこの世の縁も盡き果て、無爲の都へ歸る時がせまつた。素より一念不生の心には迷もなく悟もない。憎愛取捨を離れては煩惱即菩提、生死即涅槃である。願くは此後太子を御身の子と思つて慈しみ給へ。また吾が亡骸をこの城の東なる夕陽山に荼毘して、墳のしるしには無憂樹を植ゑさせたまへよと、こまなくと御遺言も終りまして、正念合掌して眠るが如く崩じられました。波闍波提夫人を始め宮中の一

同は暗夜に灯を失ひたる心地して、哭泣の聲は宮の内外に聞えるばかりであつた。されどかくて果つべき事ならねば、その亡骸を香木の棺に納め、種々の供養を設け、香薪を積み、茶毘に附し、その玉骨を七寶の器に納め、地景を相し、塔を建て、廟の前には一樹の無憂樹を植ゑられました。悲風慈雨長く聖母の尊靈を慰むるの標となつた。摩耶夫人は三界の獨尊たる太子を懷孕したまひし功德廣大であると云ふので、直に忉利天に昇り、永く天上の快樂を御受けになりました。

斯くて太子は、摩訶波闍波提夫人愛撫の下に成長し、御年五歳で、加冠の儀式が執り行はれた。大王は臣下に勅して七寶の玉冠及び瓔珞を遣らしめられた。徳貌慈容は日に益々揚り、諸國からは争うて珍異の物を献じ、牛羊園に充ち、佳草園に連なり、寶貨玉石は宮殿せましと積み重ねられた。太子はかゝる榮華を極めた宮中に御生長遊ばされ乍ら、心は常に高遠

の境に住して逸樂に染着せず、學藝を好み智識を開發する事にばかり御心をを用ひられました。淨飯大王も太子の聰明穎智なるに望を囑せられ、諸方より名士達人を聘して太子の教導を托せられた。當時學藝といへば皆婆羅門の家に專囑せられたるものであつたから、太子か教育の順序も亦波羅門家の學風に随つて、跋陀羅尼だの毘奢蜜多羅だのと云ふ、婆羅門第一の大學者を招聘して太子の師とせられました。太子も世間一般の風習に随つて先づ最初に五明の教育を御受けになつたのです。五明と云ふのは、一には聲明、二には工巧明、三には醫方明、四には因明、五には内明である。第一の聲明とは言語の差別、文字の音韻、事物の名目等を明了に知る事で、第二の工巧明とは技術、工藝、陰陽、曆數等を明らかに知るの法、第三の醫方明とは、禁厭、咒詛、藥餌、針灸の術を究めて、病苦を癒えしむるの法、第四の因明とは邪正を識別し、眞偽を判定する論議法、第五の内明とは六凡四聖、因

果の理を究め、人々個々本來具有の心性を明了に知悉する事で、即ち宗教の學をいつたのである。

玄奘三藏の西域記の中に印度に於ける普通學のことを論じて、蒙を開いて誘進するには、先づ十二章に遵ひ、七歳の後漸く五明の大論を授くとありますから、太子も七歳にして始めて就學し、先づ悉曇の十二章を學び、次に五明を學ばれたのであつたと思はれる。已に五明を學んだ上は更に進んで四吠陀を講究するのが、婆羅門の學を修める順序である。その四吠陀といふのは、第一には梨俱吠陀、第二には偃馬吠陀、第三には耶柔樓吠陀、第四には阿闍婆吠陀といふ。されど太子の幼時の學問はたゞに五明や四吠陀を誦誦するを以て能事とせられたのでは無い。伽毘羅仙人に關係ある伽毘羅城に御降誕ありたる太子は、また數論をも御學習になつた事は疑ふ可らざる事でありませぬ。

佛出世當時の印度は國を擧げて哲學の淵藪とも見るべき状態であつた  
 ものと思はれます。九十五種の外道と云ふ辭が今日に傳はつて居るので  
 すが、尠くも百種に近い學派五天の間に並び行はれて、其々の名家頭目が  
 其徒衆を領じて居た。佛成道の後相ひ亞つて歸伏した三迦葉目連等の如  
 き人々は、皆是等一派の頭目と仰がれて居た人であつた。埃及や希臘の文  
 明が各々其物質的精彩を發揮して居た太古の時代に於て、印度の天地が  
 優秀なる精神文明の光華に充ちて居たなどは、今日から考へて實に奇異  
 の感を催するの外はありませぬ。



七一



第七節 一門の王族と武藝の競争

三祇百劫の間に於て宿植善根の太子でありますから、此世一生に於て漸く修得する様な尋常通途の兒童に比すべきではない。太子は實に無師智、自然智を具備せられた。初めに太子教育の勅命を受けたる毘奢蜜多羅は、吉日を選んで太子に拜謁致しますると、太子は寶石を鑲めた香木盤と筆を執り、毘奢蜜多羅が言ふまゝの句節を天性不測の靈筆を以て、回鸞麟馬、虎頭の畫、悉曇、懸河、驪龍の點その書態といふも一樣では無い、あらゆる國々の文字で、穴居する人、海の人、蛇を拜する賤の民、火や日輪を拜ひ、人文字といふ文字は云ふに及ばず、符調記號に至るまで、法を究め、則に遵ひ、自然に龍牙、虎爪の勢を具へて御書き遊ばされた。次いで算數の學を申し上げんとて、毘奢蜜多羅は一より百、百より千、乃至洛に至るまでを數へ並

べました。太子は毘奢密多羅がいふまゝに御書き取りになつた許りでなく、師の教へをば待たずして、晴夜の空の星の数を算へる式から、次は大海の滴の数を算ふる式、恒河の濱の砂の數、またその上は一萬年のその間、毎に世界中に降るべき雨の滴の数を算ふる數、此の世界の過去未來、その劫數を量るまで、悉くの數目を請じ遊ばされたのであつた。其外天文地理、禮儀、法則、文といふ文學といふ學、閻浮提中の書に於ても、殘る事なく御究めになつて居らせられた。天稟の御聖德に、毘奢密多羅は痛く驚き舌を卷き、太子の德を讚歎して、太子は教師の教師なり、實にも太子は大師なり、誰か太子の師たらんや、嗚呼、某は太子をば、仰ぎて拜したてまつると畏れ入つて退下したと云ふことであります。

また太子は後來淨飯大王の後を繼ぎ迦毘羅城主となり、列國の間に雄飛すべき重任を負うて居らせられる御身分でありますから、其教育も嘗

に文事ばかりでなく武備も缺けてはならぬと云ふので、大王は釋迦種族の中に於て最も武藝に熟達せる羣提々婆なる者を延いて太子の師といたされ、殊更に設けられたる勤劬園中に於て武術をも教習せしめられたのであつた。武藝といへる中にも先づ射術を始として、大弓五種の射術を傳習せられました。その五種とは、一には遠射、發する所の箭能く遠達に達す。二には聞聲射、其音聲を聞いて即ち射る。三には中射、發する所の箭意に隨つて中る。四には親射、發する所の箭一も疏濶なし。五には斷物射、射る所の物として、透斷せざるなしと云ふのである。太子の御年十二三歳に達せられますと、其の妙術も益々顯はれ、德貌日々に新にして、其名聲は遠く五天に轟くに至りました。大王は一日太子をして、諸の王族と武藝を競技せしめんとせられ、同じ貴族の提婆達多を始めとし、難陀、阿什那等の諸王子を園中に招き、東方の大將を悉達太子、西方の大將を提婆達多と定め、數

人の俊才を擇み従はしめ、警固の官人は四方を守り、樓上には淨飯大王出御ありて、月卿雲客も星の如くに席を構へ、東西の諸童男親戚は今日を晴と華美を盡して我兒を出扮せ、列を正して射場に練り込みました。其の光景は宛がら桃李の咲き揃ふ様に見受けられた。先づ始めには小弓の式に彈丸の的を射り、次ぎには鐵鼓の式を行ひ、競技は進んで最後に角觥を試みる事になつた。皆何れも太子の威神力に敵すべきでは無い。諸の王子等は精力已に盡きたるにも拘らず、悉達太子は獨り萬藝に達し、また膂力も衆人に勝れ給ひ、一同の者は誠に古今未曾有である。稱讚致しまして、たそれにひきかへ提婆達多は三度までも恥辱を取り、憤懣湧くが如く熱腸さますに由なく、不興げに従者を卒めて城門を出でんとしたのである。が先驅の者速しく馳せ廻り、今城門の外に一大象ありて門を遮りたために混雑を起して通過する事が出来ぬと報じた。この象は毗舍利城の産で

あるが、形相端正で大勢力を具へて居る。彼の國の人民が與に商議して、今や迦毘羅城淨飯大王の太子悉達多は、智慧聰達にして、相師は之を見て神童と爲し、必ず轉輪聖王の位に登りたまふべき御方なりと聞く。この象を以て太子に貢獻せばやと、瓔珞珍寶を以てこれを飾り、牽めて迦毘羅城の王宮の門前に至つたところであつた。

この時提婆は大いに怒り、躬ら先きに立つて城門を出て見ると、果して大象は門頭に横はり牙を怒らして停立して居た。提婆は進み寄りて拳を固め、大象の頭を磔と撃ちました。さしもの大象も金剛力に撃たれて地に仆れ、提婆は無造作に従者を連れて過ぎ去つた。次に難陀が眷屬を引き連れて門を出ますと、前行の者が立ち停つて進みませんでした。其の故を尋ねて、提婆達多が大象を打ち仆した事の由を聞きました。難陀は我れも象を見んと群聚を押し分け、象の邊に往きつくんと見て打ち笑ひ、この畜



生何ぞ我が行路を遮るやと脚を擧げてしたゝか蹴飛ばしました。同じ金剛力の難陀の事ですから象は五尋ばかりも飛び去り、堀端に打ち倒れて吼え苦しみ死に垂んとして居ります。諸人はこれを見て提婆達多といひ難陀王子といひ何れも筋力無雙であると褒めはやして見る者が群集して、その喧しき聲が城中に聞えました。太子は近侍の奏上によつて其次第を聞き哀に思しめされ、罪なき獸類をたゞ追ひ退けなばよきものを、猥りに傷け痛むるは無慘なる仕打ちである。我れその象を救ひ得させんと仰せになつて、従者を卒ゐて城外に立ち出でたまひ、件の象のほとりに立ち寄り、玉の御手に象の牙を採つて曳きよせられると、さしもの大象も軽々と引き立てられて身を起し、しかも苦痛頓に癒えて甦へつた様に、太子を見て耳を垂れ尾を伏せて拜謝の體を顯はした。太子は芽出度毘舍離城民の誠意を受けさせられたのであつた。





第八節 城外閻浮樹下の冥想

太子もはや十六歳の春を過ぎされました。其の頃、迦毘羅城下に耕作の節、宴として、野外の田苑に大王の出御ありて、農夫耕作の状をみそはせらるゝ儀式がありますので、大王は太子を伴ひ、諸の釋種群臣夥多の女官達を隨へ、城門を出で、萬頃の田面に男女老少の農民が、耕耘に従事して居るさまを御覽あそばされ、太子を顧みて仰せらるゝやう、この肥えたる土地を見られよ、此等の勤勉なる農民を見られよ、歡樂と幸福とを充たすべき此等の城邑山川も、我身百年のその後は、皆悉く御身のものなるぞと、大王は興に入りて馬を進めつゝ、巡覽せられました。太子は暫く御足を止め、て靜に四方の風物を御覽になると、此方に種を蒔く農夫、彼方には車を牽く牛馬、深く茂れる叢には甲蟲爬蟲啼きすだし、高く聳ゆる梢には栗鼠

の飛びかうさまも見え、黄金色の大空に鳶は翔りて輪を畫き、彩色せる殿堂の周圍に飛び交ふ孔雀の羽色も美しい。太子はこの大平の景色を眺め乍らもつらく、烈しい生存競争の慘狀を徹見せられたのであつた。彼の黠き農夫等は己のがじ、口を糊せんがために、如何ばかり骨をも身をも摧く事であらうか、燃ゆる様な暑い日にも牛と喘ぎを共にしつゝ、玉なす汗を流して居る。そればかりでは無い、靜に地上の有様を觀見すると、蟻は蜥蜴の餌となり、蜥蜴は蛇の食となり、蜥蜴と蛇は復更に鳶の餌食となるのである。泰平無事の世の有様も一歩進んで考へて見ると、禽獸蟲魚の微細なものから人間界の狀態までが、三途苦界の實況に外ならぬ。哀れなもの、は苦界輪轉の衆生である。我等は生死解脱の大道を得て、此等を救済しなればならぬと思召し、閻浮樹の下に禪定地を得、泰然として此處に跌坐せられました。時に、羽衣を着たる五人の神仙が、飛行自在の通力を以

て虚空に翔け騰り、南より北に向つて彼の閻浮樹の上に蒐りますと、頓に通力を失ひ、飛び過ぎることが出来ません。神仙は各々顧りみて、我等は昔から諸處を飛行してこの樹上を過ぐると度々であつたが、曾て遮られたこともなく、通力を失つた例も無い。然るに今如何なる殊勝の威徳力であらうか、我等の神通が其力を失ふは不思議の至りである。其樹を見下しました。太子が現に救世の思に沈み、默然として結跏趺坐して居給へるを見まして、是れは梵天王であらうか、或は天帝釋か、毘沙門では無からうかと種々に思惟しました。其時に森の中から微妙の聲にて、五神仙に告ぐる者があつた。これ大梵天にもあらず、亦天帝釋および毘沙門天にもあらず、釋淨飯大王の太子悉達多である。梵天帝釋諸天王の威徳も、悉達太子一毫の威徳にだも及ばぬのである。この故に今汝等は閻浮樹の上に至つて飛ぶ事も出来ず、通力を失つたのである。此を聞いて五仙は共に偈を説

いて太子を讚歎し、また諸神にこのことを告げ知らせんために、雲井遙に飛び去つたと云ふことである。

淨飯大王は諸の釋種眷族及び女官等と宴を開いて歡を盡し、日中も過ぎました。太子に常侍の者共も、何時しか歌舞音曲の面白さに心を引かれて、宴樂の場に馳せ參じて居りました。夕陽は早や西山に春いて、天幕の影も遙か東の方に落ちました。今更太子が御席に在らせられぬことを知り、常侍の者は打ち驚き、右往左往に奔走しました。太子は大なる閻浮樹の下に端坐して、深き冥想に入らせられたのであつたが、殊に不可思議な事は總ての木蔭は移り乍らもその閻浮樹の蔭は移らず、端坐をします。其頂を掩うて、西に傾く斜陽を防いで居ました。一同不思議の感に打たれましたが、其時梢の上に微妙の聲ありて、太子よ胸の叢雲の霽れて隈なくならんまで、我も蔭をば移すまじと聞こえたので、人々は皆奇特歡喜の

情に堪へません、馳せて大王の所に至り、長跪して偈を以てこのことを言上いたしました。大王ヨ太子ハ今閻浮樹蔭ノ下ニ在テ、端坐思惟シテ三昧ニ入りタマフ、光明ハ照曜シテ日山ノ如シ。此ハ是レ眞實ノ大丈夫ナリ。樹影ハ卓然トシテ移動セズ、唯願クハ大王自ラ觀察シタマヘ、太子ノ相貌ハ云何譬ヘバ大梵諸天王ノ如ク亦切利天帝釋ノ如シ、威徳魏々トシテ光明赫タリ、遍ク彼ノ諸ノ樹林ヲ照ス」と大王はこれを聞き、已り直に閻浮樹の所に至つて、太子の巍々たる身相を御覽になつて、覺えず、掌を合せて偈を説き、譬へば山峯ニ夜炬ヲ燃スガ如ク、亦明月ノ虚空ニ在ルガ如シ、太子安穩ニシテ深禪ニ入ル、我レ今コレヲ見テ喜ビ且ツ懼ル」と申された。大王が喜び且つ懼ると説かれたのは、太子の相好が好何にも殊勝で威徳巍々たる様を見て喜ばれしは、尤もながら、大王情々思し召される様太子の誕生ありし時多くの婆羅門及び仙人等が太子を相し預言したことは、太子

國に在らば轉輪聖王となりて、天下を一統せられんも、若し出家せば正覺  
 を成就して一切衆生を濟度したまはんと云ふのであつた。今太子がこの  
 樹下に端坐冥想に耽るの正しく厭世悲觀であらう、さなくば出家の兆  
 では無からうかと痛くも叡慮を惱まさせられ、太子に向つて何故にこの  
 樹下に端坐せしむと問はれました。太子はこれに答へて申さるゝやう、農  
 夫の苦しみ牛の喘ぎ、猶その上に鳥獸畜類互に殺し殺されつ、空飛ぶもの  
 も水中に泳げるものも何としてこの苦しみを免れん、思念すべきは此處  
 なりと憂ひに沈んで居られました。大王はいよゝゝ太子出家の志が起  
 つたことを憂へ、急に促して共に王城に還御あらせられ、其後は宮殿を造  
 り、姪女を増し、日々ひたすら世間の娛樂に太子の心を慰めん事にばかり  
 盡力せられました。佛陀の性格は、後の四門出遊の事跡と合せ考へて見る  
 と明了に拜察せられて、宿因の尊きことが感ぜられるのである。





第九節 耶輸多羅女の入内

太子が閻浮樹下に於て禪定に入り、深く人生の根本問題を觀想せられ、  
てから以來は、淨飯大王は益々太子に出塵の念あることを憂慮せられ、若  
し太子が王位を踐むことを厭うて、出家學道する様なことがあつては、我  
が血統はこゝに絶えて、連綿たる釋種の未來も衰亡の外は無。何とかし  
て太子出家の道心を退けたいものである。之が方策としては、先づ世間情  
慾の快樂を興ふる事が必要であると思し召され、大いに工事を起して、規  
模宏大なる三個の宮殿を建築せられました。その一字は冬季暖かきがた  
めにとて、總じて角なる材を用ゐ、内には檜の板を張りかざし、次ぎの一堂  
は夏清涼の風をひくため、下には花の紋ある大理石を敷き、周りは石材の  
良好なるものを撰み、他の一殿は煉瓦造りにて、青き葺を覆ひ、殿宇相連つ

て方圓數里輪奐莊麗比ぶるに物もありませぬ。高塔の空に聳ゆるものは秋雲の天を指すが如く、低廊の地に横はるは春霞の風に靡けるが如しとでも云ふのでせう。樓上樓下不斷の天樂を聞き階南階北四時の妙華を見る。娵妓は海棠の美しう咲き出でたるの風情佳人は梨花の優しう綻びたる容姿金鼎王を炊ぐに桂を薪となすと云つた形容も思ひ出される様で人間一切の快樂至らざるなくまた盡さざるなきまでに備へられました。併し乍ら太子は境遇を逐うて氣を動かす様な淺薄な御心ではありませぬ。如何にしてか此の生死を解決せん、如何にしてか此の人生を解脱せんかと憂悶せられつゝ御年もはや十七歳の春を迎へさせられた。

大王は深く叡慮を惱まし群臣を集會して太子出塵の念を退かしむるの方法を商議せよと宣ひ群臣は勅命を畏み各々思慮を回りました。時に一老臣が進み出て言上するや、臣つらく愚懷をめぐらすに太子は

已に成長したまへども未だ定まりたる宮妃と申すもの存さず是に因りて自ら御心も結ばれ樂みたまはずして出塵の志を發したまふこともあるべし。されば速に四天下に絶世の佳人を求めてこれを入内せしめられましたならば屹度愛憐の御心も生じ時を經るに従つて王子も芽出たく御誕生あるやうになり愛の絆となりて之が爲に出家學道を思ひ止まりて實位に即きたまひ迦毘羅國の運命と釋迦族の未來は必ず萬代不易ならんと奏言致しました。居並ぶ百官も此議誠に卓論なりと一齊に贊同申しましたので大王も甚だ叡感遊ばされ諸國に命を傳へて太子の妃に備ふべき容顏端正種姓高潔の婦女を撰むべしとの勅詔が下りました。そこで先づ納妃のことを太子に言上致しました。

太子は大悲心を起して深く思惟したまひ方便を以て衆生を濟度せんがために之を聽き容れられました。古徳が夫れ法身形なく隨應して現ず、

機縁萬途、化迹一にあらず、或は欲を離れて道を受け、或は汚に處して權を現す。若し其納妃を示さざれば、凡識人種に非るを謗る。五欲の境を示すと雖も、一心の志を改めずと云はれたるは、能く大聖の化迹應現の本志を道破したるものといふべきであります。悉達多太子は、大王始め群臣が納妃のことを御勸め申し上げた時、偈文を説いて人間倫理の大道を示し、その希望の一端を明かされました。その大意は、蓮華は淤泥の中に生長して、淤泥の爲に染め汚されず、過去の諸佛も妻子なきにあらず、妻子ありと雖も、五欲の爲に汚染せられず、我れ過去佛に隨順して、女を納れて妃とするも、敢て諸の禪定を退失せず、故に我れ今好む所を書に陳ぶべし、汝宜しく書に依つて求むべし。即ち其女は凡女にあらず、嬌なく、嫉妬なく、諂ひなく、誑はすことなく、諸の病なく、常に質直にして、慈悲心を起し、衆生を愛愍することなく、我子の如く、好んで施恵を行じ、乃至夢にも邪心なく、未

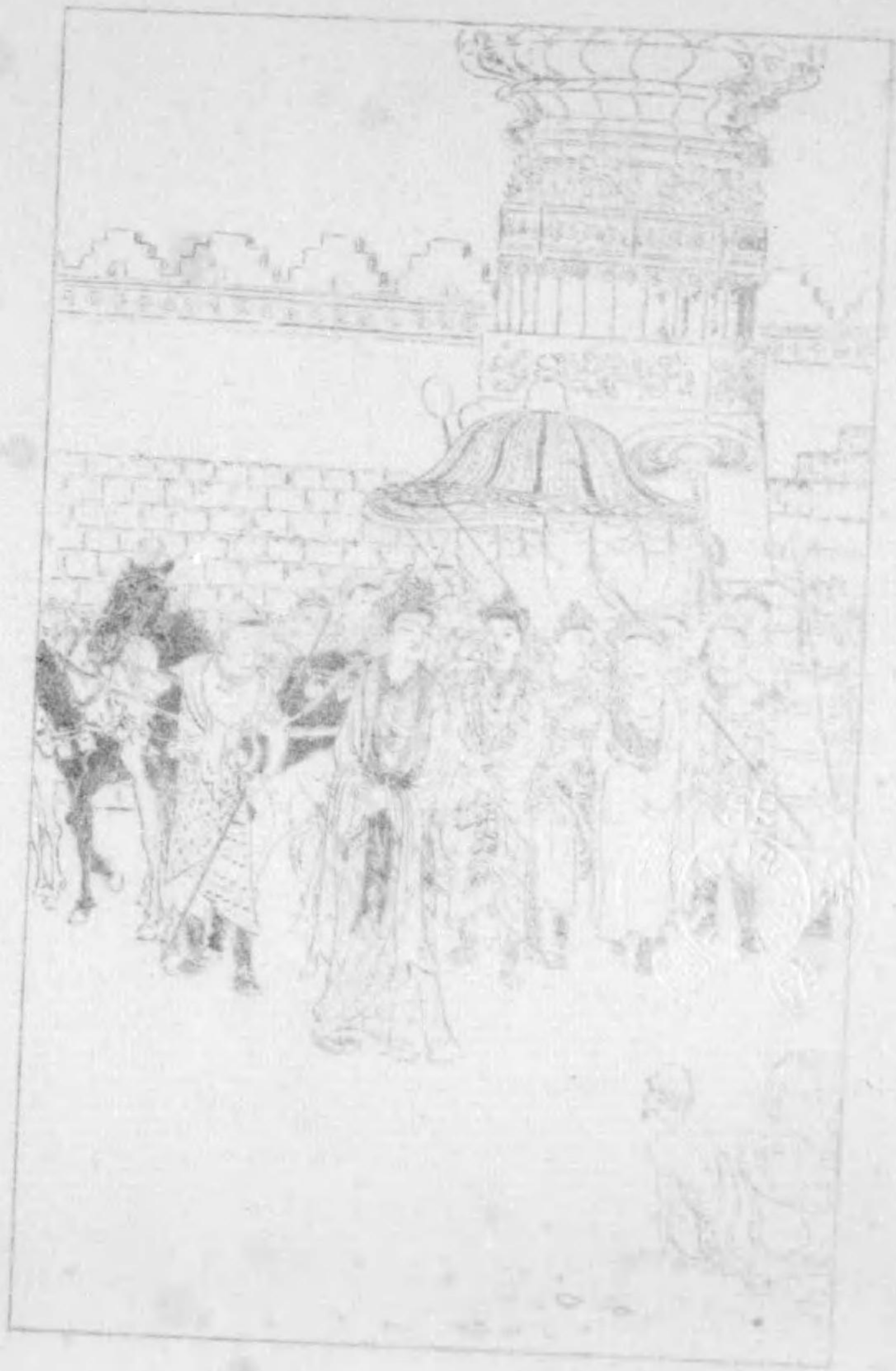
だ曾て懷孕したることなく、貞潔にして欲樂を貪らず、慚愧を知り、身語意清淨にして恒に善を修し、舅姑に事ふること實の父母の如く、左右を愛念すること自身の如く、夫睡れば方に眠り復先きに起き、諸の義理を解了するもの、是の如き女なれば我方に取るべし。凡劣を以て妃となすことを得ずと書してこれを大臣に示されました。大臣は乃ちこの書を以て大王に奏上し、諸大臣は勅を奉じて所々を歴訪し、天下第一の美女を撰み、太子の新宮に備へ、早く叡感にあづからんものと、諸國より多くの美人を召し集め、其中にも殊に勝れたるものを選びました。時に同じ釋種の善覺長者の女に、耶輸陀羅姫と云ふのがあつた。花の顔、玉の肌、技能賢才並べ備へて、名聲五天に響いて居りました。大王は此の旨を御聞になつて、使を遣はし、聘禮を重くして之を迎へ、太子の妃と爲さんと申し遣はされました。で、長者は謹んで勅旨を奉じ、耶輸陀羅女は數千の姪女并に警固の官人に



圍繞せられて王宮に入る事になりました。滿朝の月卿雲客より庶民の末に至るまでも皆萬歳を唱へて悦びを述べぬものはありません。釋種の王統は萬々歳であると祝福致しました。

大王は猶ほ夥多の匠工を集め、廣き御苑の中なる緑の小山に、華美を極めた堂宇を築き、又側には物見の塔を立て、外には廊廓を廻らし、青磁の門楣、栴檀の闕結構を窮めた樓閣の邊からは、此所彼所に清泉、迸り、青黄赤白、咲き亂れた花園の中には、夥多の鳥が囀つて居る。人生の榮華と壯麗を窮めた宮居の間に、晝夜の歡樂を盡して太子が出塵の志を斷ぜしめんとつとめた、宮庭臣僚の考へは共に皆畫餅に歸したのであつた。太子は初めより人間欲界の快樂なく、目前如幻の福樂よりも、未來永劫の自由を得、自覺覺他の妙果を樂しまんせられたのである。





### 第十節 太子四門の出遊

愛情の獄吏に囚はれて、聲色和樂の鐵條網を張り廻されて居りますと、人間は生死の問題などは關せず焉で、無事泰平の一代を送るべき約束になつて居るものですが、太子は決して世間通途の人情に支配せられて、快樂の跡を逐ふ様な御心ではありませんでした。榮華歡樂の深宮を出で、  
、意のまに、世態を見んとする御思し召しからして、近侍の者を集めて、城門外のことも何くれとなく御下問があつた。一人の者進み出で宮籬の外は國の首都、薨聳ゆる殿堂に、つゞく園生は美を競ひ、茂る樹林の蔭涼し、城を出づれば原野あり、沼澤細流、岡丘の幾十俱盧舍過ぎ行けば、頻婆娑羅王の領地にて、前途はるかかの彼方には、廣き世界に限りなき蒼生は豊けく住なりと、詳かに城外の狀を説きましたので、太子は急に園林に

出遊せんことを思ひ出でられ、父王の聽許を請はれました。  
 大王は大いに喜び、群臣に命じて先づその道筋を定め、途上には一切の  
 不淨を掃ひ、盲人、不具者、病める人、老衰堪へざる者などは、多感なる太子の  
 哀情を動かす恐れがあるからとて、悉くこれを排除せしめ、名香を焼き  
 珍花を散じ、大路に砂を布き、並樹には幢幡を懸け、總ての準備が整ひまし  
 たので、太子は才智穎敏なる近臣、兒童を從へ、七寶彩色せる寶輦に召して  
 東門より出遊あらせられた。迦毘羅城下の人々は、太子の出遊を聞き傳へ  
 て、男女堵をなし、歡呼の聲を揚げました。時にその多くの拜觀人の中に、見  
 るも哀れなる一老人があつて、怪げの檻樓を纏ひ、憔悴ける皮膚は日に焦  
 げて肉なき骨に絡みつゝ、その背は永き年月の勞苦の業に偪りて、齒のな  
 き腮は慄きつゝ、震へる脚を支へんと瘦細る手に杖をつき、迫る喘ぎに胸  
 を痛め呻吟く聲音も哀れに聞えつ、輦寶の側に佇立んで居ました。警固の

官人はこれを見て無禮であらうぞと云つて策を擧げてしたゝか撃ちた  
 ものですから、老人は驚いてそのまゝ地上に倒れました。太子は寶輦の内  
 よりこれを見たまひ急に官人を制し、御者に命じてこれを扶起さしめ、侍  
 從に向つて此は何物なるやと御問ひになりました。侍從も仕方がありま  
 せんから、此は老人なりと申し上げた。太子は何をか老人といふやと問は  
 せられたので、侍從の者はこの者も昔日は嬰兒、童蒙の時ありしも、日月停  
 まらずして皮膚衰へ、血肉枯れ果て、餘命幾許もなく、消えなんとする燈  
 火の刹那輝く姿なりと答へました。太子は更に問ひたまふやう、この人ば  
 かりが老の身となるやと、侍從は形を正して一切衆生は貴となく、賤とな  
 く、老い行く果ては皆かくの如くにして異なることなしと奉答した。太子  
 は、日月は流れ邁き時變り年移り老の至ること、電光石火の如し、此身安ん  
 ど侍むに足んや、我れ王家に生れ富貴なりと雖も、豈に獨り是を免れんや、

云何んぞ世人は而かも怖畏せざるやと仰せられ、人生厭離の思ひ胸に満ちて、急に寶輦を還へせと命じ、園林に至らずして宮殿に還御せられまし

た。大王は太子が出遊を中途にして引き還へされたので、痛く宸襟を惱ませられ、何とかして其心を慰めんと新に城南に山を築き、萬國の珍木奇草を取り集めて、數奇を極め、五歩一亭、十歩に一樓、珠玉を磨き、金銀を鑲め、嶺には瀧を落し、麓には流を湛へ、太子の遊覽に備へんとせられた。太子はまた郊外に出遊せんとの御思召でありましたので、今度は道筋に汚穢不淨の物を掃ひ除けたるは勿論、拜觀の男女も十歳より三十歳の者を限りてこれを許し、ましてや老人病者は嚴かに外出を禁じ、準備は已に成つて、太子は定めぬ如く侍從百官を隨へ、鹵簿肅々として南門に御車を進めさせられた。其の時又もや思ひもよらず、年少紅顏の拜觀者の中から一病

者が現はれた。渾身は紫斑に瘡崩れ、肉枯れ、骨露はれ、冷汗は黄ばみたる額に流れ、足も曲りて歩み得ず、歪める口と凄き眼に五臓の苦惱を示して、路の傍に打ち臥して居た。太子はさとも寶輦の内より御覽ありて、侍從に向ひ何人なるかと御問ひになつたから、病人なりと御答ました。何故病人とは云ふぞと御下問があつたので、この者も曾ては一壯漢なりしといへども、嗜欲に耽けり、飲食の度なきに因りて四大調はず、遂に病を發し、百節疼痛して氣力衰へ、五味甘からず起居安からず、手足ありといへども自ら働く能はざるに至りしものなりと奉答した。太子重ねて病める者は此者のみに限るやと仰せられたので、侍從は病めるものは決して此者一人に限らず、一切人民貴となく賤となく、嗜欲を縱にし、飲食を慎まざれば、皆是の如きの病を得るものなりと申し上げ、太子はこれを聞いて大いに歎息せられ、是の如くんば身は是れ大苦衆なり、世人歡樂を恣にして

他日大苦惱を受くることを覺悟せず、是れ愚癡闇昧のなす所なり、誰か之を救ふ者ぞ、今我れ何ぞ遊觀嬉戲せんや、と御氣色麗しからず、轅を回らしてまた王宮に還御せられました。

東南の二門より出御あつた時は、何れも不祥のことがありましたから、今度は道を西門の方に取り、諸の醜穢不淨の物を排除することは前二回よりも一層嚴重にして、更に改めて御出遊の途に上らせられた所が、又しても不思議や、何れよりか四人の者一輿を昇ぎ、香華を上布き、幡を持つあり、髪を被るあり、悉く號泣しつゝ、これに従うて過ぎゆきました。太子はまたこれを見て侍従に、其の何物なるかを問はせられた。侍従これに答へて、輿中に横はる者は死人なり、生命已に絶えて、諸根皆壞れ、魂魄は遠く去つて、形體のみ獨り残りしものである。親戚故舊の者は之に對して、恩愛離別の情切なるがめに、かく憂へ悲しむなりと御答へした。太子は震懼

して、此人のみ然るや一切衆生も皆然るやと御下問があつた。侍従は畏みて答ふるやう、死は此人に限るべきにはあらず、王侯貴族より下民卑賤に至るまで、死は一人として免るべきにあらず。比翼連理も恣艶かなる間の語らひ、偕老同穴も息ある内の契り也。息止みぬれば、夫も焼いて灰となし、魂去りぬれば、妻をも埋めて土となす。有爲轉變の人生は、憑むに足らぬものであると御答へ申し上げた。太子はこれを聞き、歎息して、世間已にかくの如きの死苦あつて一瞬間も安心すべからず、然るに世人云何ぞか、大苦惱を抱きながら、情慾に貪着して、放逸に慣れ、心木石の如くにして、怖畏することを知らざると仰せになり、怏々としてまた宮殿に還られま

した。  
太子は他日更に北門より出御あらせられ、園林に入り、閻浮樹下に端坐せられた。其の時何處からとも無く、異相の人が顯はれて、鉢盂を持ち、錫杖

を執りて太子の前に立ちました。太子はこれを見て汝は何者ぞと御問ひ  
 になりますと、我は比丘なりと答へました。更に比丘の境界を説いて、能く  
 親子夫婦の愛着を断ち、輪廻を離るゝを比丘といふ。今我が修する所の如  
 きは、色聲香味觸法に着せず、無漏聖道に心を遊ばしめ、八苦の海を越え解  
 脱の岸に着き、無爲の都に到るなりと言ひ了りて、神通力を現じ、虚空遙か  
 に飛び去りました。太子はこの時善哉々々、人天の中唯此を勝れたりと爲  
 す。我當に決定して是道を修すべしと仰せられました。この四門出遊は太  
 子が老病死を問題として、出離解脱の境に到られた順序を實例の上に示  
 されたものであると思ひます。





第十一節 太子出家の決心

一生補處最後身の菩薩が衆生濟度の爲に下生したまひたる悉達多太子にして、老病死が必至の道理なることを果して了知して居られなかつたのでありませうか。世俗凡庸の輩でも十九の壯齡に達して、老病死の何人にも免れざる一般の理を領解せざるものはありますまい。然るに智慧聰達五天に比肩すべきものも無い様な太子にして、侍臣の説明を待つて始めて老病死の意義を了解せられたとは如何にも受け取り難い不合理の事の様には思はれますが、一人の老者を見て直にこれを一切衆生の問題として問ひ質し、一人の病者に依つて一切衆生の病を想ひ、一人の死者に遇うては直に一切の無常を問題とせらるゝところ、これが即ち太子の太子たるどころであつて、こゝに三界の大導師、一切衆生の慈父たる佛陀の

大慈悲を拜することが出来るのであります。世俗の徒はたとひ幾百千の老人を見ても、實際にこれを以て一切衆生の問題とはせず、幾千萬の病人に遇うても、之れを以つて自己の身に引き當てることだもなく、幾萬億の死人に遇うても、またこれを以て適切に我身も免れ得ぬ實際問題とはしないのである。近隣の老病死を見ては、さまざまで心を動かさず、同胞の老病死に遇うて、漸く心を動かし、自己の老病死が實際身に迫つた時、始めて驚くのが常である。然るに太子は金殿玉樓の中、紅燈綠酒の間に、不自由なき御身にてありながら、巷間の一死人を見て直にこれを以て、自己の問題とし、一切衆生の問題として胸に浮べる感慨を陳べられ、命數こゝに絶えぬれば世になき人の數に入る、喜怒愛樂も情念も、茲に一切空に歸し、身を燒かるゝも熱からず、鼻は四香の分別なく、舌は甘苦の味もなく、耳に聾して目は盲ひ、六根永く眠るなり、茶毘の煙にひせ泣くは、姻親故舊のみならず、廣

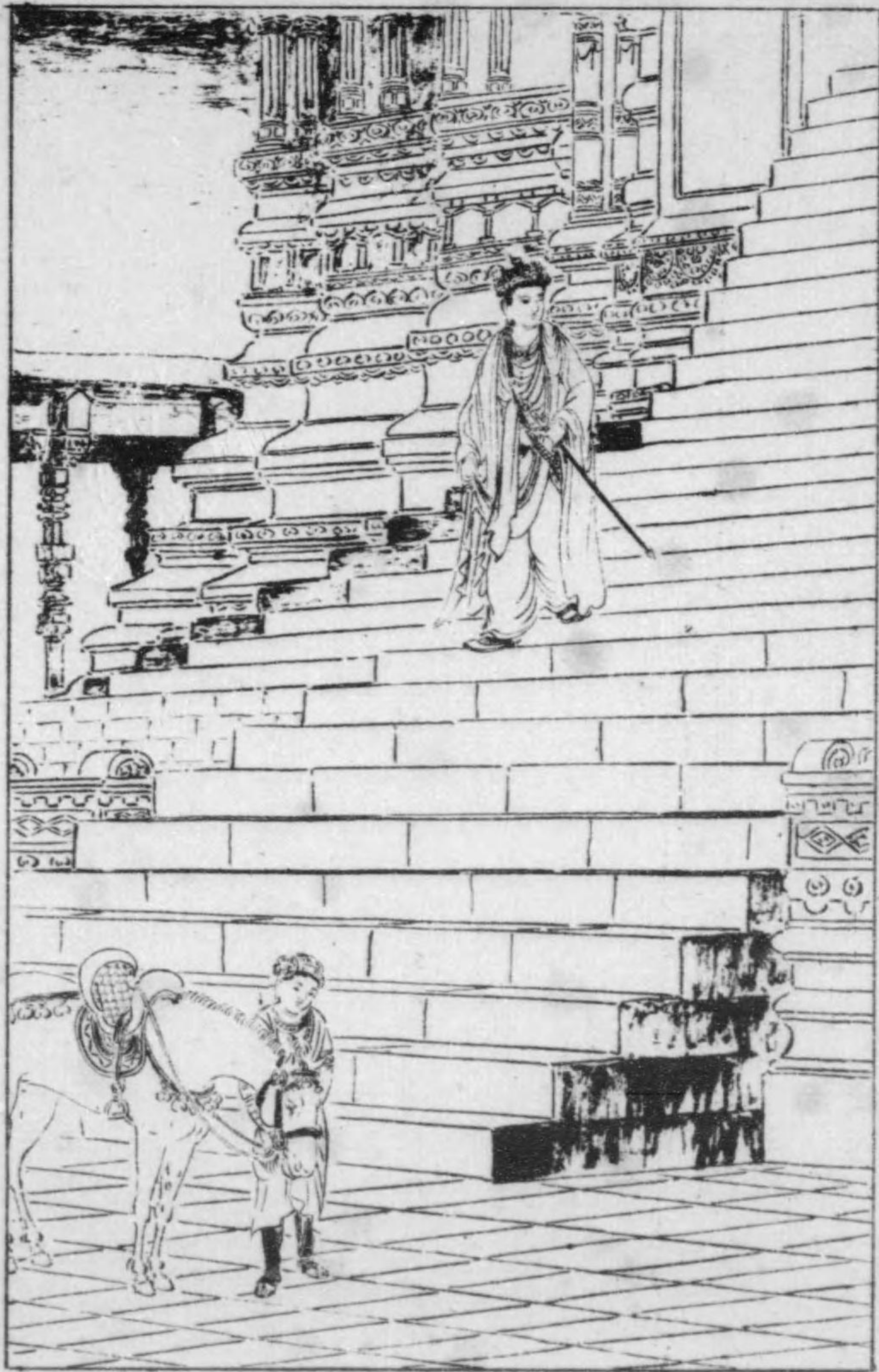
き此世に生存へる、貴賤善惡賢不肖踵を繼ぎて諸共に、死出の旅路に赴かん、再び娑婆に生れ來て、愛別離苦の一生を終れば、又も空に歸し、又めぐり行く生死、これぞ誠に三界に流轉輪廻の道理と、いとも痛切に變遷無常の理を示された。その限りなき慈悲心と甚深なる悲哀の性情とは、事に觸れ物に感じて愈々烈しくなり勝つたのである。身邊を圍繞せる一切の繁榮と歡樂とを以ては、到底満たすことの出來ぬ太子中心の缺陷と追求の情とは、太子の眼の前に起つた老病死の傷ましい相貌と、その反對に比丘の姿に静寂尊嚴の面影を御覽になつてからは、太子の御心は懊惱に充たされて、今は早堪へ切れなくなつたのである。浮世の何物にも煩はされざる比丘の静寂の面影が、さながら平和なる天國の囁きとなつて、太子出塵の心は動かざること、大盤石の如くになつた。かうなりては、飛花落葉も悉く無常の道理を説破し、水聲山色も亦悉く解脱涅槃の妙味を歌ふものと

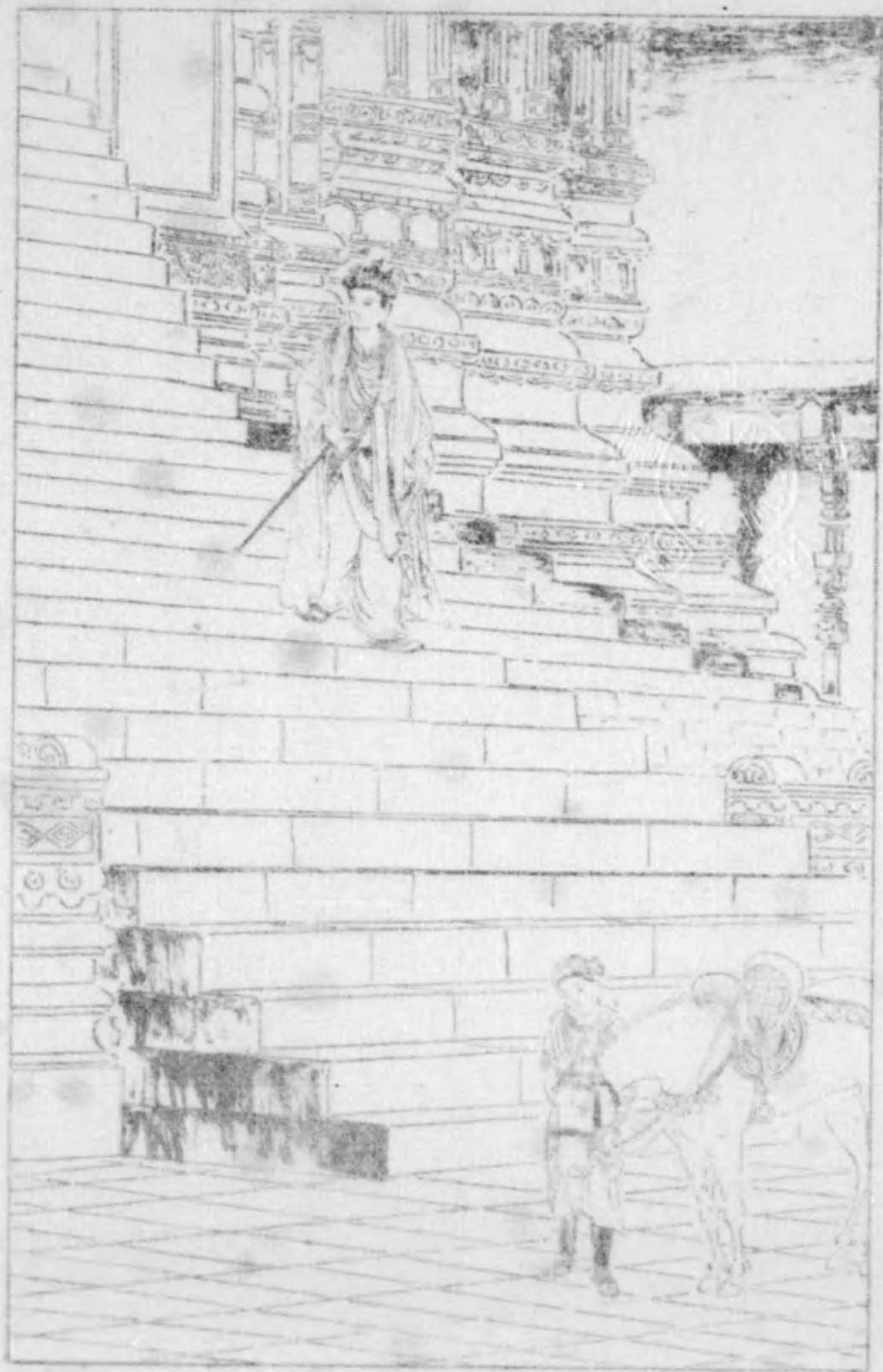


解せられます。随つて花の如き宮女も臭穢を盛るの革囊と見え、蜜の如き  
 艶語も向上出離の妙響と観ぜらるゝのであります。太子が北門出遊の時  
 尊嚴静寂なる比丘の相貌を見て後、深く歡喜の心を催されまして、花園に  
 清遊し樹下に静坐し御休憩あらせられると、その折しも王子誕生の吉報  
 を御聞きあそばされました。太子は心中に思ひ召されます様、さなきだに  
 出家求道の障壁が多い上に、又もや一つの障壁が出来た。此愛執の念を破  
 るは我が求道の門出であるとな観ぜられつゝ、城門さして還啓せられた。  
 其時に迦毘羅の城中は王孫誕生の吉報に由つて、庶民熱狂して歡迎し、  
 太子はこの歡呼の聲の中に宮殿に入らせられた。このとき城内に同じ釋  
 種の一婦人が氣高い太子の御姿を見て戀着の心を生じ、切なる想ひを歌  
 にうたうて幸ひなるは父なるかな、幸ひなるは母なるかな、かくの如き子  
 を得たる父母の身は樂しきかな、かくの如き郎君にかしづく婦女の身は

樂しきかなと言ひました。この樂しき幸ひの語は二様の意味があつて、罪  
 業と輪廻の轍を免れて自由なりとの意味をも含んで居ります。所から太  
 子がかかる場合に、自分が絶えず思ひ惱んで居る所の、最高の思念を呼び  
 起して、我を策勵して向上の一路に進ましむる意味ある歌と御聽き遊ば  
 して深く感奮せられました。やがて御身に御着け遊ばしたる寶玉の頸飾  
 を取りはづし、これは師としての汝に對する我が謝禮の意を表するもの  
 であると言つて與へられました。この若い一婦人は太子の心を知らずし  
 て、太子は我を戀うてこの贈物を賜はりしものならんと、儚なき空想の榮  
 華を夢みました。  
 太子また竊に思惟せらるゝやう、父王の我が出家を憂慮したまふは王  
 位を嗣ぐべき一子なきが爲である。今幸に羅睺羅の出生あり、始めて如法  
 の出家を遂ぐべき時を得た。實に道を求むべき時は來りぬ、十有九年の迷

妄を擺脱して、涅槃妙樂の道に入るべき時は到れり。今こそは一切世間の榮華を捨て、山林幽寂の中に入り、一切衆生を濟度すべき使命を果すの時である。太子の胸中に離欲厭塵の志熟して、出家得脱の因縁が熟しました。其の時十方無邊阿僧祇の諸佛如來は、神通力を以て其宮殿の鼓樂絃歌をして微妙の音を出さしめ、この最後身の菩薩を勸請せられたのであつた。その偈文には、宮中の姪女絃歌の聲欲を以て而かも菩薩を惑はす、十方諸佛の威神力、此音聲を變じて法音を爲す。尊昔し衆生の爲の故に、身肉手足も吝むことなし、持戒忍辱及び精進禪定智慧皆修行す。菩薩の勝福を求めん爲の故に、一切世間能く及ぶ無し。是の諸の衆生の瞋と恚と癡尊慈を以て皆懺伏す云々とある。かくの如く十方諸佛が太子に出家を勧め給ひ、太子はこの偈を聞き了りて、速に出家して正覺を成じ、衆生の迷苦を救はんと奮起せられた。





第二章 樂 篇

第一節 太子の入山學道

淨飯大王は、元より太子に出家離塵の志あるとを知つて居られたもので、すから、宮城の周圍には四方に大壁を築き、その壁門は青銅の重き扉を鎖し、これを開くには兵士百人の力を要するやうに作られた。その響きは四十里の外に聞え、この門内にまた二重の門を造り、宮殿を出でんとするには、必ず三重の門戸を通らねばならぬ様に警戒せられてあつた。これ等の三重の大門は、いつも堅固に鎖閉せられて、四方の門には一々に忠義老實の番兵を配置し、更に城外にも數多の人を以て警護せしめられ、太子は全く愛の牢獄に深く閉ぢ籠められたのであります。けれども、此等の物的施設の用意周到を以てした位では、真正の解脱を求め、一切衆生を濟度せん

とする、熱烈な太子の菩提道心を抑壓することは出来なかつた。  
 淨居天の守護ありと信じ給へる太子は、その年十二月八日に至り、夜色  
 沈々、四面靜寂、今こそは正しく我が出家の素懷を遂ぐべきの時なりと決  
 定せられたのであります。この時太子の決定心は、元より後世のいはゆる  
 佛教とか宗教とかいふべき教の基を開創せんとするが如き志があつた  
 のではない。今のいはゆる宗教なるものを起すの企てや、今のいはゆる哲  
 學なるものを専攻せんとするの意があつた譯ではなかつた。また如何な  
 るものが眞理なるやを攻究せんとする御考へでもなかつた。たゞ自分が  
 實踐する事蹟の結果が、未來世に於て宗教となるや、將た哲學となるや等  
 のことを豫想し、顧慮し給ふ暇もなく、太子はたゞ生死の解脱を求め、一切  
 衆生を困厄の圈中より救ひ出さんとする、熱心道心に驅られて出家せら  
 れたのであつた。

翠張紅閨の裡、蘭燈光幽かなる處、肥立ちも健かに眉目美はしき幼兒に  
 添乳して、安らかに睡つて居られる耶輸陀羅夫人に、餘所ながら訣別せん  
 ものと、太子は夢深きその枕邊に寄りそうて、無邪氣にして高貴なる妃の  
 寢顔を打ちまもり、心の中に稽首して、聲も微かに宣ふやう、我が最愛なる  
 耶輸陀羅よ、四大海水の深きにも比べる事が出来ぬ愛情を、我身に獻げた  
 志の程はいつまでも我身に泌みて忘れはせぬ、されど今我別れずば生  
 死の暗を如何にせん、一切衆生を奈何にせん。我は苦界の人のため、我が青  
 春の行樂も、王位の榮も、住み慣れしこの宮殿も、高樓も、今潔く振り捨てん。  
 我は今より寂寞孤影の出家となり、他日三界の導師たらん。今こそは生死  
 恩愛の訣別である」と、太子は大勇猛の心を以て、人情を截斷し、翠張の裡を  
 出でられました。宮殿を去らんとして行く、幾千の宮女の爛睡せるさ  
 まを見給へば、世の辛酸は曾て身に覺えも無いが、旦暮にたゞ我身を慰め

んがためと、絲竹の調べ歌舞の曲務め終りて酔えるが如く、嬌姿艶態さまざまに、寝ねし姿の無邪氣なる黄金の飾瑤の櫛、緑の雲の黒髪、の亂れて襟に懸るもあり、玉を欺く顔の艶畫ける如き額際閉づる眼元に愛添ふる、睫毛は縞子の光澤深し、豊かに肥えて延ばす足屈める、脰は假枕、或は袒裼、或は裸體、軒聲轟々、齧齒憂々、その千態萬狀なる美醜の狀況を、目撃せられたる太子は、憮然として思惟したまふやう、一切女人の容姿は眞に是の如きものか、粉脂の紅顔、綺羅の衣装、瓔珞華鬘は、燦然として目を奪ふばかりであるが、其形體を徹見すれば、筋肉膿血、肺肝脾腎、一として樂しむべきものは無い。九孔不淨にして、革囊に臭穢を盛る、奇とすべきもなく、淨と謂ふべきも無い。薰らすに香を以てし、飾るに華彩を用ひて見た所で、本來が借り物であつて見れば、いつかは還さねばならぬ時が来る。百年の命は臥して其半を消して仕まふのである。而も其間には憂惱多く、樂み幾ばくもな

い。世人云何ぞ恒にこの事を見て居乍ら覺悟せぬのであらうか。三界は怙むに足らぬ、姪樂を食ぼつて終に何の得る所があらうぞ。我今古昔諸佛の修する所の行を學ばんが爲に、急いでこの家を出づべしと、勇猛不退轉の大決心を震ひ起して、後宮を出でさせられた。

天高く氣澄みて、虚空宏大星斗欄干、太子は靜かに廐に到り、御者の車匿を呼び給へば、その御聲が車匿の耳には雷霆のやうに聞えた。車匿起き出で太子を見奉り、驚いて更に言ふ所を知らず、茫然として居ました。太子は車匿に向ひ、我れ思ふ所あり、健歩を牽き來れと命じたまへば、車匿はます／＼打ち驚き、黒白も辨かぬ小夜中に、何處へとは乗りたまふ。四境太平無事にして、逆敵の襲ひ來れるにもあらず、今何の料にか馬を召されたまふやと、怕る／＼も難じました。太子は徐かに宣まふやう、我は浮世の英傑が世界に並ぶ國々を征服して、血潮に塗れた、轍の記録を後の世に残

した跡に倣ふものではない。我は元より浮世の玉位に望みが存するので  
 は無い。我が望む所の王領は榮枯盛衰絶えて無き、いと優れし天國であ  
 る。汝知らずや、無常の殺鬼は念々に攻め來る、我れ一切衆生のために是を  
 降伏せん。生死の魔軍を摧破するべき門出に、由なきことを言ふ必要は無  
 い。早く健陟を牽き來れと仰せられました。が車匿は猶も首を振りて、大王  
 の勅命重ければ、深夜の御出遊は承り難しと否みました。が、太子御決心の  
 御氣色が尋常で無い事を拜しまして、車匿は今更如何ともする事が出来  
 ません。恐るゝ健陟を牽き出しまゐらせました。數多の監率を以て嚴守  
 せられたる北門は、何の響きもなく、自づと開き、三重の城門も難なく開  
 いて、唯一人として之を知つたものもありませんでした。虚空の諸天は優  
 鉢羅華白蓮華を雨らし、沈水栴檀の香を燒き、諸の音樂を奏して太子の出  
 家を讚歎した。太子はその時住み馴れた宮殿を顧み、我れ若し生老病死の

根本を斷ぜずんば終に再び王城に還らず。我れ若し阿耨多羅三藐三菩提  
 を得ず、又法輪を轉ずること能はずんば、必ず還りて父王に相見え、我れ  
 若し恩愛の情を盡さずんば、終に還りて摩訶波闍提及び耶輸陀羅に見  
 え、誓ひを立てさせられた。梵王諸天は太子の前後左右を衛護し、釋提  
 桓因は寶蓋を執り、四天王は馬の四足を捧げ、雲を踏み霞を分けて太子は  
 こゝに全く出家離塵の素懷を達せられました。  
 太子が出家を遂げられました。御年は、普通十九歳と云ふ事になつて居  
 るのですが、種々の經説を調べて見たり、印度緬甸等の佛傳を研究したり  
 して見ると、どうも廿九歳御出家と云ふのが事實らしく拜察されるので  
 あります。梵網經などは七歳にして出家し、三十にして成道すとあります  
 が、これは如來の御境界がたとへ太子様の御身分でありました。幼年に  
 して既に出塵の御徳を具へさせられたと云ふ意味の御文言としか解さ

れませぬ長中増一の阿含經や根本說一切有部毘奈耶雜事などには明に廿九歳出家の説が存して居るのである。玄奘三藏の西域記にも當時の印度に十九廿九の二説があつた事をしるされて居るのです。又踰城出家の時期にも二月八日四月八日と云つた様な異説があつて一定して居ませんが南方佛傳には七月満月の日と云ふ説があるのです。要するに經文翻譯の場合に數字を書き誤つたり梵漢の曆日を混交したりした事が此等異説の原因かと思はれます。





第二節 跋伽仙人と對談

當時の王舎城は五天竺に於て文明の中心と云はれた位で、その附近には多くの森林があつて、就中婆羅門の學者達が修行するに最適當の山が五箇所もあつたので、王舎城は一名五山城とも呼ばれたほどである。摩訶陀國中の各森林には如何にせば真正の解脱を得べきか、如何にせば涅槃寂靜に入るべきか、如何にせば天上に生を得らるべきかと、冥想凝思に耽つて居るもの、難行苦行を修するもの、その數を知らぬほど所々に散在して居りました。

夜陰に乗じて迦毗羅城を出でさせられた悉達多太子は、白馬健陟に跨り御者車匿を随へ、諸天の守護を得て一向に道を急ぎ、東南數十里にして藍摩城を過ぎ、天明の頃阿拏摩河畔の森林に入り、山中の小高い處に馬を



立てさせられた霧は千仞の溪を埋め、雲は萬丈の嶺を裏む。目馴れぬ奇樹  
 異草香風吹きそよいて四方に薫ずる有様で、太子は心すがくしく歡喜  
 に堪へずして、車匿を顧み宣ふやう、十善萬乘の位もたゞ是れ夢中の榮華、  
 宮殿樓閣も眼前の塵埃に過ぎぬ。況んや愛執妄念は煩惱の薪であるから、  
 無明の猛火を免れる事は出来ぬ。我は今より勤苦數年の其後に、今に勝れ  
 る大果報を得るであらうと、車匿は有無の答へを爲し得ずしてたゞ茫然  
 と佇みました。其時巖の彼方から忽然として身體は枯木の如く鬚髮は雪  
 を欺き、木の葉を編みて身に纏ひ、朽木の枝を束ねて肩にかけ、手には異し  
 の花籠を提げた老人が顯れ來つて、太子主従の姿を見て眉を擧め、大喝し  
 ていふやうは、是は胡亂の者共かな、不道無慚の形相にて何れの處より迷  
 ひ來れるぞ、抑もこれなる山は七佛出世の已前より開けたる顯密二種の  
 靈地にて、北は雪山の峯續き南は摩訶陀の淨嶺にならび、丘には三條の法

瀧落ち麓には二道の靈河流れて、しかも溪には正覺化生の青蓮華、四時を  
 嫌はず花開き、嶺を越ゆれば八正道の秘門あり。三摩耶形の靈場、無上菩提  
 の妙嶺なるに、汚れたる不淨の形にて、馬に乗り鞭を揚げて踏み荒らすと  
 は、言語に絶せし振舞なり。其身に纏へる衣服は幾萬の蠶を殺せし絲に  
 て織り、生木生草を枯らして染めなしたる不淨の衣、瓔珞玉帶は人力を疲  
 勞せしめて造り設けし汚穢の具である。若し汝眞實に發心修行の志あら  
 ば、速に懺悔滅罪して不淨の衣帶を脱ぎ捨て、從者を追ひ返へして登るべ  
 しと、言葉も荒く言ひすて、霞の中に去りました。

太子は手綱を引き止め馬より下りて、健陟の額のあたりを撫でながら、  
 汝はよくも宮中より我を扶け出だして大任を果し呉れた、その功績はや  
 がて汝が身に報ゆるときもあらう。今より直に厩に還り神妙に生壽を全  
 うせよ、我大果報を得たる後は一切有情と諸共に離苦得樂の利益を得ん

と言ひ聞かせたまへば、健歩は地に踞まり膝を屈め、太子の御足を甜めながら、啼き悲しんでたゞ涙を垂れました。太子は更に御者なる車匿に打ち向ひ、汝我が言に背かずして此處まで隨ひ來れるその眞情勞苦、何物を以てか報ゆべき、されど今汝が聞きし如く仙家の法令には背かんすべも無い、速に健歩を牽いて宮城に還れと、佩びたまへる七寶の劔を解き、寶冠瓔珞を脱いて、髻を斷り捨て、身には粗布染衣の緇衣を纏ひ、過去の諸佛は菩提を成就せんが爲めの故に飾好を捨て、鬚髮を剃除す、我今諸佛の法に依るべし、汝はこの飾好の具を持つて、還つて父大王に奉れよと仰せになりました。車匿は路上に泣き伏して、血涙を流し、身不肖乍ら御幼少の時より仕へ奉り、出遊ある毎に寶輦に添ひたるに、今寂寞無人のこの山中に獨り我君を遺したてまつりて、爭か空しく主なき馬を牽いて還る事が出来ませうかと、太子はこれを諭して、會者常離の道理を説き、我は生れて七日

の後、悲母を喪うた、母子すら猶死生の別を免れぬ、況んや餘人に於てをや、疾く去て父王に告げよと、車匿も今は強ゆるに言葉もありませぬ、涙を呑んで命に従ひ、太子の遺物を鞍につけ、健歩の轡を執つて牽立てました。馬も太子の御影を顧み、長息して悲哀を訴へ、車匿は情迫り感極り、手を擧げ足を蹠だて、低回願望しつゝ、展轉悲泣して麓に向ひました。

太子は既に車匿と健歩とに別れ、孤影蕭然出家の身となり、獨り進んで跋迦仙人の居處を訪はせられた。林中に苦行せる學徒等は何れも現身の苦行を以て未來の淨果を得ることを期し、樹皮木葉を衣となして、地に躡居して自ら鬚髮を抜くもあれば、釘を刺せる木履を穿つて一脚を翹げて立つもあり、荆棘の上に伏して泥土と灰を身に塗るもあり、稜角ある石を以て胸または腿肉を撲ち裂くもあり、或は木の葉を噛み、或は糞を喰ひ、魚の如くに水中に浮ぶもあり、虫の如くに叢に泣くもあり、梢の上より倒に

懸るもあれば、土中に身を埋めて首ばかりを出せる者もあり、頸に毒蛇を纏ひて坐するあり、死屍の爛れたる上に腰かけたるもある。何れも皆身體は疲弊して骨は枯れ血は乾いて見る影なく窶れ果て、居た。太子は始めて此等苦行中の仙人を御覽になり、心潜に疑念を起し、跋迦仙人に御尋ね遊ばされた。今此等の苦行を修して居る者は、何の果報を求めやうとして居るのであるか。仙人は偈文を以て之に答へました。是等の苦行を勤修しますると三十三天に生ずる果報が得られます。苦行精進の後でなければ決定安樂の果報が得らるゝものでは無い。樂を求むるの因は苦行に外ならぬ。太子はまた仙人に尋ねられました。諸天に生じた果報は安樂であらうが、福分が盡くればまた墮落する事を免れぬ。六道輪廻の昇沈は要するに解脱の目的では無い。現身の苦行に依つて六趣の苦輪を上下するは血を以て血を洗ふ様な無意味の徒勞に過ぎぬのであると、往復論議の決

果太子は獨り深く思惟に沈ませられた。貪欲の人は道を枉げ苦を忍んで財寶を求め、慈愛無き王は猥りに師を起して國土を侵奪する。此等諸の仙人は生天の果報を求め、爲に此等の苦行を勤修して居るのであらうが、それは未だ真正の解脱を求め得るの道では無い。我は今生死苦惱の根源を斷じて真正の解脱を求め、一切衆生を困厄の中より救はんと志して居るのである。何ぞ更に又苦因を増長する様な謬れる修行を取らんやとて、仙人の懇留を辭して深林を出で去られました。

人間が此の世の中に生存して居りますのは何の爲でありませうか、我が身に道業を修め進んで社會人生を教導せん爲に外ならぬとは、事新しく今更説明する迄も無い事ですが、昔も今も推しなべて迷信に囚はれて、謬つた修行に憂き身をやつして居る者が尠く無い事は實に慨歎の至りであると思はれます。佛の御説法が常に苦に偏せず、樂に著せぬ中道の御趣

意であつたのは、當時の印度に於てかゝる苦行を貴び徒に己の身心を苦めて、個人的に未來生天の果報を欣求する様な思想が旺盛であつた事に着目せられて、如何なる場合にも人間の本分を失はぬ様にとの御誓願を宣せられたものと拜察されます。後に至つて太子が苦行の法を斥けて無上菩提を證せられた事と思ひ合はして、此等苦行の仙人と對談せられた因縁を觀察すべきであります。





### 第三節 車匿遺物を奉じて還城

迦毘羅衛城中は一夜忽然として、限りなき驚愕と失望と恐怖とにうたれました。一國の輿望を負うて、轉輪聖王の寶位に登り給ふべく期待されて居た太子は、舉朝監視の城門を遁れて突如として出家せられました。老境に臨んで、將にその位を譲らんと志して居られた淨飯大王は、唯一人の繼嗣を失つて茫然自失せられた。

開閉の音が城外幾里の遠きに聞ゆると云ふ城門の扉は開け放たれ、御者の車匿と乗馬蹏陟の影は見えず、太子の寢殿は日が己に高く昇りたるも、猶深く翠張を垂れて音もせぬ。今は疑ふ所も無く太子は出家せられたのであると定まつた時、淨飯王宮悲痛落膽の有様は筆紙にも述べ盡す事が出来ません。此の事を傳へ聞いた臣庶百億の騷擾は、迦毘羅衛の一城を

化して鼎沸の巷とならしめた。暗雲深く殿上に立ち籠めて一千の姦女五百の童妓、狂氣の如く泣き悲む光景は、天人の五衰まのあたりの有様でありました。侍従の大官は恐懼措くところを知りません。先づ四門の監卒を呼び出し、汝等は徹夜不睡の巡檢を申しつけられ乍ら、何とて太子が深夜馬に召して出でたまひしを知らなかつたかと、厳しく詰問しました。守衛の者共は一同恐れ入り、前夜にかぎり何故か睡眠頻りに萌して堪へ難く思はずも、監守を怠りしこと遁れがたき滔天の罪過である。この上は如何なる嚴科に處せらるゝも詮方ありませんと、口を揃へて申立てました。時をうつさず四方へ追手がさし向けられたが、今は時が後れました。侍従の大官達も、この旨を大王に奏上し、罪を闕下に請ふ事になつたので、錯愕失神し給へる。淨飯大王は、忽ち昏倒して危篤の御有様に拜されました。侍醫の面々湯藥を奉り、近侍の女官達が御介抱申し上げて、大王もやう／＼人

心地に戻らせられ、少時御言葉もありませんでしたが、稍あつて御袖に涙を抑えたまひ、我かねてより太子が出家學道の志切なる事を知悉して居た所から、人間快樂の事を盡してその心を慰め、姦女童妓に至るまで皆そのことを言ひ含め、城には三重の銅門を鎖し、數多の監卒に嚴守せしめ置いたのであつた。それにも拘らず事こゝに及んだのは如何なる次第であつたかと仰せられました。一同は恐れ入りて更に四方へ人を馳せて、須彌鐵圍の隈まで搜索しても、太子の御歸城を期せずば置かねと申上げ漸く大王の御心を慰め奉りました。

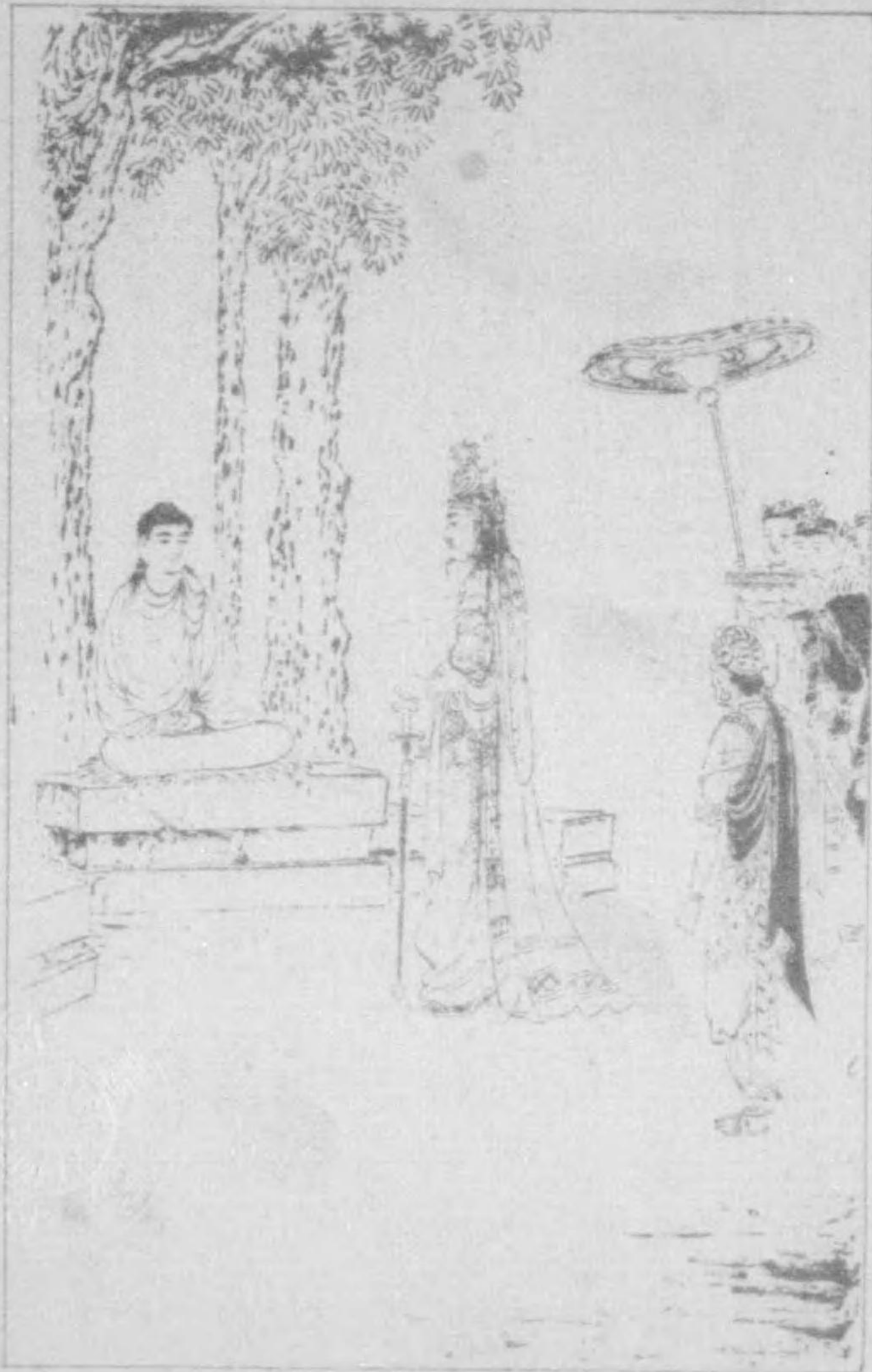
かくて數日の後東南の方面から歸つた搜索隊が、車匿と健陟を伴ひ相ひ卒ゐて王城に歸り、大王にこの旨を奏聞致しました。大王は逆鱗甚だしく、車匿を面責して、汝は兼て我が命ぜし法令を守らず、太子をして城中を遁れ出でしめ、今何の顔ありてか主なき馬を卒ゐて空しく回り來れるや、

其罪は肢體を牛裂きにするとも猶飽き足らぬ。そも太子を何處へ導き去らしめたるぞ、速にその行き越し方を告げよとせき立て給ひ、車匿は恐れ入つて奏するやう、大王深く責めたまふことなかれ、太子の出家は人力の及ばぬ不思議である。爾夜夫人嫁女悉く熟睡せらるゝとき、太子は我に勅して健陟を牽かしめられた。太子が馬に召させられた時、日頃には似ずして、健陟は一聲も嘶かず、轡も鈴も更に鳴りませんでした。大地を踏み轟かす龍馬の蹄も、たゞ空を飛ぶが如く、猶も不思議なるは、開閉の音四十里に轟く城門が自然に開けて音も致しません。天明の頃には阿拏摩河畔の森林に達し、仙人に遇うて種々の奇特を見聞あそばされ、遂に七寶の利劍を執つて、鬚髪を剃除し、飾好を捨てさせられ、寶冠と髻中の明珠と、佩びたまひし寶劍の三品は、父大王に奉れ、我れ阿耨多羅三藐三菩提を成就して、再び慈顔を拜し奉るまでの遺物として、不孝の罪を謝せよ。また瓔珞は我を

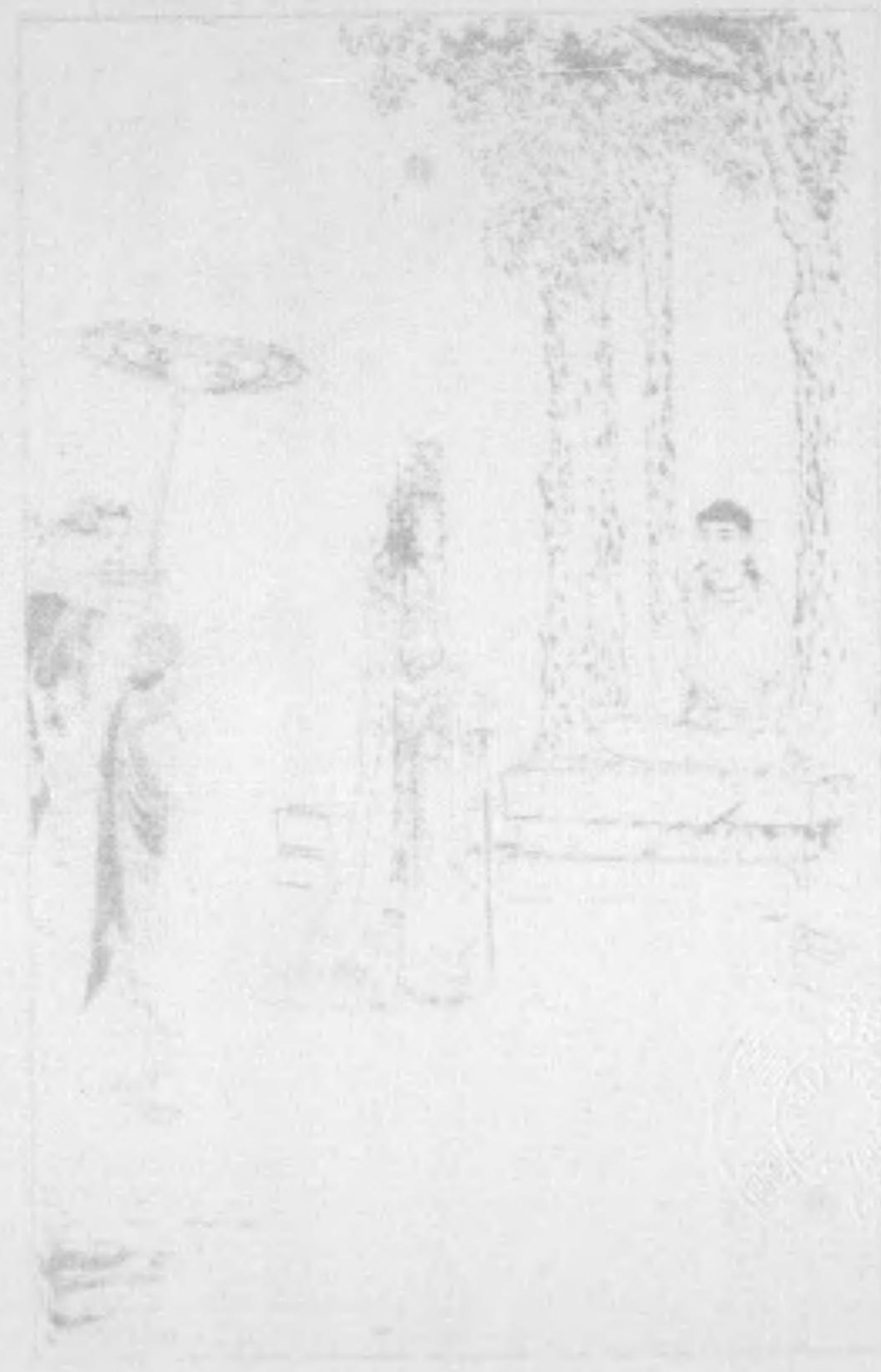
鞠育したまひし摩訶波闍提に奉れ。次に御衣玉帯を解きたまひて、これを耶輸陀羅に與へよと仰せ遊ばされました。小官は立ち去らんとし給ふ御袖をひかへ、かゝる深山に争でか君を残し置き奉るべき願くは、發心の御望を捨て疾く王城へ回りました。されど尙還幸の御心なくば、何國までなりとも召し具したまへと、赤心をこめて願ひ奉りましたが、遂に御許もありません。汝強ひて我が意に背き、發心修行の妨げをなさば、劍に伏して死すべきのみと、已に寶劍を手にかけあそばされましたので、小官も止むことを得ずして、仰せを畏み、御別れを告げて立ち回りました。次第と、車匿は恐るゝ物語り致しました。

太子は聞き終つて悲歎に暮れ、突然立つて我も今よりその山に登り、太子と俱は道を修し、艱難を一にし、生死を齊うすべきであらうぞ、車匿よ其の健陟をこれへ引けと仰せられました。臣僚百官は打ち驚き、大臣王師は

大王を諫めて申すやう、これまた勅諭とも覺えませぬ。君今此國を捨てた  
 まへば釋種の連綿たる血統はこゝに斷絶し、轉輪王の位は他國の手に歸  
 して、萬代の末まで不徳の譏を遺されるに過ぎません。思うに太子の出家  
 學道は梵天帝釋も皆悉く恭敬讚歎したまふ所。一朝一夕の出來心とも思  
 はれませぬ。已に御降誕の當時に相師の豫言があつたばかりでなく、種々  
 の瑞相奇特のことも拜されて居ました。到底轉輪王の位を以て出家の御  
 本懐を留め奉ることが出来るものとも思はれませぬ。殊に正覺成就の曉  
 までは太子の御身に諸天の擁護もある事と信じられます。假令深山幽谷  
 に在つて修行し給ふとも、猛獸毒蛇等の危害は斷じてありますまい。願  
 は睿慮を宥め給へと諫止しました。







第四節 王舍城の途上頻婆羅王と對話

一旦は太子の迹を逐うて山に入り、共に生死を齊うせんとまでいはれた。淨飯大王も元より賢明なる君でありますから、臣下の諫奏を容れて御幸は思ひとゞまられたが、睿慮は猶穩かならず、太子たとひ歸城の見込みなしとて、未だこのまゝに棄るに忍びずと仰せられ、王師と大臣を遣はして今一たびの歸城を勧めしめんものと、釋種親族の内より、憍陳如、跋提婆、沙婆摩訶男、阿説示の五人を擇み出し、多くの下官に命じて米穀絹帛等を運ばせ、車匿の教導によりて遠く藍摩の森林にと進まれました。先づ跋迦仙人の苦行林中に入り、王師進んで仙人を問訊して申すや、我は是れ迦毗羅衛城淨飯王宮の一族であるが、太子悉多達生老死の苦を厭ひ解脱の道を求めんと欲して出家し、この林中に來られしと聞く、大仙之を見たま

はざるや否やと、仙人答へて、我はその太子たることは知らざれども、此頃この山中に容顏端正にして相好具足せる一少年を見たり。一日我と論議して夜を徹し、我等の修する所を以て真正解脱の道にあらずとなし、遂に去つて南に向ひ、阿羅邏迦蘭仙人を訪はんと云つて爰を發足せられたと云ひましたので、王師大臣等は急ぎ馬首を轉じて南に向ひました。其途上端なくも太子が樹下に端坐思惟したまへるを拜しますると、今は一切の飾好を棄て、沙門の身となられし、變り果てた御容貌に、一同は涙ながらに來意を述べ、父王を始め波闍波提の悲哀、王妃の愁傷、群臣萬民の失望、凡そ迦毘羅衛城中に現はれた情況を擧げて、殘る所も無く御聞に達し、懇に其歸城を請ひました。太子は之を拒絶し、且つ仰せらるゝ様、我は唯だ今生老病死の苦を畏る、將來永く斯患を絶たんと欲して、此處に來れり、我今思愛を斷絶し出家する所以は、未來永遠の悅樂を求めんが爲に外ならぬと

太子の決心は到底翻へすべくも見えませぬ。王師は猶も太子に説き、先聖も未來定めて果報ありといひ、或は定めてなしといふ、此の如き有無未定の果報を求め給はんよりは、寧ろ宮城に還り給はずやと、説きました。太子之れに答へて、我は果報を希ふがために、此に出家したのでは無い。生老病死は目前に逼迫した人生の苦痛である。此苦を免んがために、解脱の道を求むるのみ、是實に大丈夫壯烈の心事である。片々たる世情の如何を以て、此所志を動す事は出来ぬと、斷乎たる御決心の御有様、王師大臣も今更如何とも致し方がありません。遂に憍陳如等の五人を遣して太子の側に隨從せしめ、二人は憍然として無限の感慨に沈み、王城さして還りました。太子は五人の從者を伴うて、東南の方に向ひ、道に鞞留梵志、頭摩梵志の女仙を訪ひ、利婆陀梵行仙人等の齋を受け、漸次に遊行して恒河の急流を渡り、摩訶陀國の境界に入つて、其都府なる王舍城に至り、如法の衣服を着

し應器を持して次第に行乞遊ばされました。擧國の人民は皆その相好端正にして諸根具足せる殊勝の容貌を拜して、早く其迦毘羅衛城の太子なることを知り、悉く歡喜踊躍して希有の心を生じ、競ひ集りて拜瞻する者市を爲すに至りました。時に摩訶陀國の頻婆娑羅王は太子がいま王位を抛ち出家行乞して我國に來遊せられたと聞き、直に一人に勅して太子の所在について、其情狀を伺察せしめられた所が太子は今般茶婆山に在りて一の石上に於て端坐思惟し給ふと復命しましたから、王は仍ち駕を命じ臣下を從へ般茶婆山に至り直に太子に面語せられました。王は諸の儀仗を退け、徒歩して前に進み、問訊して太子に申さるゝやう、我太子を見て心甚だ歡喜す、然かもこゝに一の悲むべきことがある。太子は本是れ釋種の貴姓に生れたまひ、累世相承して轉輪王となるべき御身である。衆徳圓滿の相好缺けたる所もない。然るに其の聰明を以て自ら王位を捨て、遠

く此土に來り給ふは、決して喜ばしき事とも存ぜられぬ。太子よ若し父王尙在す所からして王位を取ること、憚りたまはゞ、當に我國の一半を太子の爲に御譲り致しても苦う無い。若し我國の一半を以て狭少であると、思し召すならば、我れ當に一國を擧げて盡く之を奉じ、謹んで太子に臣事するであらう。復若し我國を取ることが御思召しに適はぬとあらば、進んで四境を征伏するに足る丈の強兵を御用に供するであらう。四海を統一し天下を畏伏せしむる事、最も丈夫會心の壯舉ではなからうか。太子の欲する所蓋しこの三者の中何れか其一に居らんと言はれました。王は元より己れが心を以て太子の胸中を付度し、太子もまた當に我が欲する所を欲せらるゝならんと思惟せられたのである。併し乍ら太子の心は已に世間の希望によりて動かすべくも無い。地上の王國は成る程頻婆娑羅王の言ふ通りに建設せられやうが、靈界の淨土は決して兵力や文武の材幹か

ら築き上げられる譯のものでは無い。這の問答こそ實に在家と出家との心事を對照した消息が理解されるのです。その時太子は頻婆娑羅王に答へて、我れ今既に迦毘羅衛城の王位を捨つ、亦復何に縁りてか他の王國を取らざるべけん。王たとひ善心を以て國を捨て、我れに與ふるも猶且つ取らず、何ぞ兵を以て他國を攻めんや。我れ今父母に別れ鬚髮を剃除し、王國を捨つる所以は生死病死の苦を斷ぜんがためなり。世間の五欲を求むるが爲にあらず。世間の五欲は大火聚の如く、衆生これが爲に燒かれて自ら出づること能はず。如何んぞ我れを勸めて之に貪著せしめんとするや。人の世に生るゝや生者必滅、我れをして轉輪王たらしむるも、當に死すべき時、我れに代りて此厄を受くるものありや否や。若し代はるものなからんか、豈に憂なしとすべけんや。慈父孝子、愛骨髓に徹するも、病死相代はるを得ず、苦至るの日六親傍らにありと雖も、盲人の爲に燭を設くるに似たり、何の

益が之れあらん。吾人生を觀るに、一切無常皆假にして眞にあらず。樂少く苦多く身も己れが有にあらず。物生ずれば死するあり、事成れば敗るゝあり、安んずれば則ち危きあり、得れば則ち失ふあり。此の如くにして萬物紛擾皆當に空に歸すべきなり。衆生昏迷たゞ貪愛の爲に癡網に蔽はれ、これを能く覺るなし。故に吾山に入りて苦の本源を滅盡するの法を修めんと欲す。久しく此に停るべからず。王當に正法を以て此國を治めたまへ、人民を枉ぐることを勿れと言つて、王に別れを告げられました。

天上界の理想と云はんよりは、地上の王國と云つた方が世間では歡迎せられて居るのです。歴山王は西歐から印度までを攻略した。成貴斯汗は蒙古より起つて歐亞の天地を席捲した。然れども其功名富貴の跡は今いづくに存するであらうか。身死し國亡びて荒草の裡、一基の土饅頭を留むる丈が英雄の末路ではありませんか。太子の御考へは既に地上の王國に對

して其憑そのたのひに足たらぬ事を自覺じかくせられて居ゐた。頻婆娑羅王びんばしらかうが今更いまさら甘言かんげんを以もつて其出家そのしゆけの御心おこころを抑制おさへいせんと試こころみた所ところが決けつして其成功そのせいこうを見る事ことが出来ぬのは當然たうぜんであつた譯わけと思おもはれます。支那しなの孔夫子こうふしは到いたる處ところの諸侯しよこうに向むかつて仁義じんぎの政治せいぢを説とき、王道わうだうを以もつて天下てんかを歸伏きふくせしむべき事ことを説いたのであつたが、太子たいしの御考おんかんがへは既すでにはや地上ちじやうの王國わうこくを超越ちやうえつして生死しやうじの變遷へんせんを離はなれたる、常寂光じやうじやくくわうの淨刹じやうせつを建立こんりふする事に存ぞんして居ゐたものと察さつせられます。





### 第五節 阿羅邏仙人と對談

頻婆娑羅王は太子が王位を捨て、出家し給ひしを見て、己れの情によりて其意を迎へ、これに地上の榮華を勧められましたけれども却つて意外の教訓に遇ひ、大いに自ら覺るところがありました。今は信心面に顯はれて太子に申されます様太子よ今真正解脱のための故に志す所の目的に進まんと決せられました上は敢て猥に御留め致さぬ。唯願くは太子速に所期の大道を修せられよ。若し無上菩提の大法を開發し、正覺成就せられたならば、最初に先づこの地に錫を巡らして我れを濟度したまへと言つて、合掌瞻仰して見送られました。頻婆娑羅王歸佛の因縁は此時に於て締結せられました。

かくて太子は當國第一流の達道の老仙なる學徳兼備の阿羅邏迦蘭と、

鬱陀羅摩の二仙を訪はんとして、王舍城より西南に向ひ、尼連禪河を渡り  
 更に五六里も進まれました。此時優爲迦葉、那提迦葉、竭夷迦葉の三迦葉に  
 遇うて論議せられました。この三迦葉は何れも事火外道と言つて、多くの  
 弟子共と溪邊に修行し、梵天と日月水火に事へて居たのである。太子は此  
 と論難往復の決果是も生死輪廻の法にして眞正解脱の道にあらずと斷  
 ぜられた。故如何となれば、水は常に満たず、火は久しく熱からず、日出づる  
 も移り、月盈つれば虧く、道は必ずしも有形の物質に存するものでは無い  
 と云つて其處を去り、城北なる彌樓山に阿羅邏迦蘭仙人を訊ねられた。阿  
 羅邏迦蘭仙人は數百人の弟子と共に難行して居ましたが、太子の相好殊  
 勝なるを見て大いに喜び、立つて之を迎へ太子出家して今此に來り給ふ  
 こと我れ悉く之を知る。太子の出家は大象の縑索を離れて自ら免脱する  
 が如し、古昔の諸王盛年の時に當りては、恣に五欲の歡樂を受け、體力の漸

く衰ふるに及び俄に國土并に一切の樂具を捨て、出家學道の徒となり  
 しものあり。然れども是の如きは未だ奇となすには足らず。太子今は青春  
 の齡を以て、能く五欲を棄て、遠く此に來る、眞に是れ奇特殊勝の事なり。  
 當に勤めて精進して速に彼岸に達せられよと云ひました。太子もこの知  
 己の言を喜び、仙人を敬ひ問うて申さるゝには、我が爲に生老病死の四苦  
 を斷ずるの法を示されよ、我れ是を聞かんと。この時仙人は太子の問ひに  
 對して答へて申すには、善哉問ひや、衆生の始めは冥初よりし、世間の衆  
 生は冥初に由つてあり、是即ち世間の本性なり。冥初より我慢を起し、我慢  
 より癡心を生じ、癡心より染愛を生じ、染愛より色聲香味觸の五微塵氣を  
 生じ、五微塵氣より地水火風空の五大を生じ、五大より貪瞋痴等の諸煩惱  
 を生ず、是に於て生老病死、憂悲苦惱の流轉あり。この生老病死の苦本を斷  
 たんと欲せば、先づ出家して世間を離脱し、戒律を持し、忍辱を行じ、空閑の

處に住して禪定を修習すべし。禪定に四種の階級あり、若し定を修して欲  
 惡不善の法を離るれば、覺と觀とあり、是に於いてか初禪に入る。覺と觀と  
 を除いて喜心を得、是に於て第二禪を得。第二禪に由りて喜心を捨て、正  
 念を得、樂根を具すれば第三禪を得。第三禪に由りて苦樂を除き、淨念を得、  
 捨根に入らば第四禪を得。第四禪に由りて無想定、果報を得るなり。世の  
 一類の梵志は之を以て解脫の處と爲す者あれども、これ究竟の解脫にあ  
 らず。四禪の色想を離れて空處に入り、又た有對の想を滅して識處に入り、  
 次に無量の識想を滅し、唯一識を觀じて無所有處に入り、最後に種々の想  
 を離れて非想非々想處に入ることを得、これを究竟の解脫とするなり。是  
 れ諸學者の彼岸とするところ、太子若し生老病死の苦を斷たんと欲せば、  
 當に此の如きの行を修學したまへと説きました。その説く所頗る幽妙で  
 あつて、固より跋迦仙人等と比すべきでありませぬから、太子は暫くの間

この阿羅邏迦蘭仙人について、其學説を研究するところがありましたが  
 其學説に服することが出来なくなりました。太子は遂に仙人に向つて問  
 ひ返されるには、老仙よ然らば若し有我ならば知の有無も問題である。そ  
 の究竟の境界とせらるゝ非想非々想處には、我が有無を如何に解決せら  
 れんとするや、若し無我ならば非想非々想處とは言へぬ。我若し知なくん  
 ば木石に同じ、我若し知あらば攀緣もある。又染着もある。然らば則ち究竟  
 の解脫とは思はれぬ。どうして之を眞正の涅槃と云ふ事が出来様か。唯だ  
 麤煩惱を除く丈の事は出来やうが、まだ細煩惱は残つて居る。細煩惱細結  
 滋長すれば復下生を受け随つて生死に流轉する。故にその説くところは  
 眞の彼岸では無い。若し能く我及び我想を除き一切盡く捨つるのでなけ  
 れば、決定して眞の解脫となすべきものではないと言つて、仙人と御別れ  
 になりました。次いで鬱陀羅摩仙人を訪はれましたけれども、鬱陀羅摩仙



人の所説も阿羅迦蘭仙人の説と格別の特色もありませんでしたから、到底真正解脱の法は他に随つて修學すべきものでないと御覺りになつて其處を去られました。

彼等仙人は其當時印度に於ける第一流の宗教者にして、其右に出づる程のものは無かつたのであります。然れども彼等は傳承的婆羅門の思想以外に何等の造詣する所もなかつたのである。太子は少壯の御身を以て已に彼等老仙の脚跟下を悉く勤破せられた其御識見といふものは其時すでに五天の思想界を吞却して居られたのであつた。斯うなりました上からは最早天下に師事すべきものがありません。獨學自修して以て無上正眞道を御開發遊ばすより外に方法がない事になりました。





第六節 正覺山中の苦行

太子は阿羅邏迦蘭仙人の學說も鬱陀羅摩仙人の意見も、事細かに問答研鑽して見られました。是等は未だ究竟解脱の妙境でない、と看破せられました。最早我が師と仰ぐべきものは無いと全く當時の教界に絶望せられた。生老病死の苦因を解脱することは、到底外に求めて得られぬと悟徹せられた。太子は、最早これを内觀して御求めになるの外は有りません。自己の本性に求め、自己の寶藏を打開し、本來具有の大用を現成するの決意は、やがてこゝに正覺成就の門を開かれたのであります。太子は仙人の許を去つて、尼連禪河の東岸なる鉢羅笈提山に登られました。これは前正覺山と云つて、太子が將に正覺を證せんとして、先づ此山に登られた所から後世其名を得たのである。其已前は伽闍尸梨沙山と呼ばれ

て居たのである。

斯くて太子は前正覺山より優婁頻螺村に至り、苦行林中に入られました。此處では彼の僑陳如等の五比丘が、持戒堅固に苦行をつゞけて居たのであります。太子が慾を禁じ情を抑へて、寂靜沈黙、專一に三昧に入り修行せられるありさまを見て、とても太子の勵精に及ばぬと思ひまして心を盡して太子に師事し、共に一處に修行して居た。此頃迦毘羅城にては、太子が尼連禪河のほとり樹下石上に苦行せらるゝ由を聞き、淨飯大王は王師大臣等に語つて申さるゝやう、太子は今轉輪王の位と父母妻子眷屬等を離れ一切恩愛の樂みを捨て、遠く深山に入りて苦行を修して居らるゝ由である。我今薄福にして此の如きの太子を失へる事を思ひ轉た慨嘆に堪へぬとすなはち五百乗の車に一切資生の料を載せ、これを彼の車匿に命じて苦行林に運ばしめ、勅して隨時に供養し、若し供糧盡きたるとき

は更に來つて持ち運ぶべし、太子をして乏きを感じしむるなかれと命ぜられました。車匿は勅を受けて苦行林に至り、太子の形相を拜しますると、血肉乾涸してさながら枯木の如く、皮骨相連りて血脈悉く現はれ、別人でもあるかの様にやつれはてゝ在らせられた。車匿は地下に悶絶して、漸う涙を呑み口を開き、大王太子を慕念して日夜忘れ給はず、今故らに下臣を使はし、五百乗を領して資糧の具を載せ、以て太子に餉り奉る願くはこれを受け用ひたまへと熱誠を籠めて勧めました。太子は車匿に向つて我れ父母の意に違ひ、妻子の愛を顧みず、國土をも棄て、遠くこゝに來れるは、生死解脱の大道を求めんがためである。猛火に焼かれたる手を以て、更に其落ちたる火を握るものは至愚である。一旦五欲を離れた無垢の身を、再び五欲の塵中に投入する事は出來ぬ。今この餉りものを受くるは、僅に蛇蝎の毒を免れて、却つて虎狼の口に投ずると同じである。速に持ち去つて

父王に此事を申し上げよと仰せられ、車匿も之を強る事も出来ませぬから、空しく王城に立ち還つて、大王に此旨を奏上いたしました。太子は大王の餉りものを辭して、をりく山を出で、近傍の人家に食を乞ひ、當時婆羅門の行者が實行して居た様な戒律を修し、或は一日に一米を食し、一麻を食し、或は二日三日乃至七日に一米麻を食ひ、若し他より米麻を乞ふ者あれば、其れさへも施し與へて、春風秋雨、幾星霜花開き、花散り、葉繁り、葉落ち、已に數年を過ごされました。太子の體軀は瘦せ衰へて、阿斯樹の如く、肉盡き、助現はれて、實に哀れな有様に見受けました。されども、肉身の苦痛は今更顧みる場合ではありません。生死の根塵を脱却して、涅槃寂靜の寶處に到らんとする、太子の大決心は須臾も息むことはありませんでした。されば、此風評は國の内外に傳はり、四方聚落の人々は、塔の如くに來り、太子が澹然として靜坐冥目せられるありさまを見て、感歎しました。太子

はこの苦行數年の後、未だ大安心の境に達する事が出来ません。此上とも、この苦行を續行したならば、たゞ死あるのみである。是に於て太子は、觀念せられた。苦行は未だ眞正解脱の大道では無い。自ら飲食を絶ち、徒らに體軀を毀るを以て、正覺成就の正因とする事は出来ぬ。寧ろ飲食を取り、氣力を回復し、更に大勇猛心を鼓して、精進するあらんのみと、觀念せられました。去りながら、太子が他日、大宗教家として、震天動地の大事業を斷行し、五十年間、縦横の大利益あつた事は、この嚴峻なる苦行をも厭はず、實行せられて、愈々苦行の無意義である事を、實踐證明せられた爲であります。太子は、かく決心して、徐に苦行の坐を御起ちになり、尼連禪河に下り、清流の水に沐浴し、垢つきたる衣服を洗滌して、立ち上らんとせられました。が、多年の苦行により、痛く衰弱したるため、自ら御身を支ふるの力も無い、空しく河岸を仰いで、一息截斷せんとする時、恰も好し、河岸の阿斯那樹

の枝が太子の身邊に垂れかゝつたので、太子は漸くこの枝に縋りて岸に上ることを得られました。其とき牧牛の長なる人の娘が奇特の心を生じ、淨瓶に乳糜を入れ、これを以て太子の所に來り、敬禮して供養し奉りました。太子はこの乳糜を受けて、此好美の食を供養せし施主は福壽無量ならん。我今この食を受くるは自ら正覺を成じ、一切衆生を化度せんがためなりと咒願し已りて、この乳糜の供養を受けられますと、身心頓に回復して氣力充足せられました。是皆太子が過去久遠劫よりこのかた、檀波羅蜜を行したまひし福報の熏力に因つたのであります。この時に憍陳如等の五人のものは、太子が河水に洗浴し、又好美の食を女人の手によりて受けられたのを見て、是れは正しく道心が退轉したのである。吾等が師と仰ぐ太子もこの苦行に堪へる事が出来ぬ様では、とても道果を證得する事は出来ぬと云つて、五人は遂に太子を捨て、鹿野苑に立ち去りました。





第七節 菩提樹下の端坐

太子は五人のものが己れを捨て、別れ去りましたので、獨り尼連禪河を渡りて徐に伽耶の金剛座に向はれました。其の姿を拜しますれば、魏々堂々として御歩みも遅緩ならず輕躁ならず。御顔は希望に輝いて満月の如く、心は廣くして虚空の如く、金光照耀して、過失なく、愚癡なく、恐怖なく、濁亂なく、染着なく、師子王の如く、龍王の如く、那羅延の如く、踏み給ふ所の地より皆蓮花を生じた。と御經文には傳へられて居るのです。此の時地上に惡趣の相無く善道の莊嚴が充ち満ちて、尼連禪河より伽耶に至るの道は極めて清淨にして一點の塵芥もなく、諸天は微妙の香華を散じて其の地を覆ひ、一々の樹下に衆寶の妙臺あり、臺上各々天女ありて寶器を捧げて妙栴檀沈水等の香を盛り、天の伎樂を奏して歌舞讚歎し、迦陵頻伽、鴛鴦

孔雀、共命の諸鳥和雅の音を出し、白象、白牛、白獅子等は太子を圍繞し、和暢の聲を揚げたとあります。是等は皆太子が過去無量劫より諸波羅蜜を修したまひし福報であつたのです。此までは單に入山學道せられつゝあつた淨飯王家太子の御身分であらせられますが、今は、や人天有漏の境界をお越えになつて、金剛不壞の菩提座に進ませられつゝある御身分でありますから、單に太子様と申上げる事も如何と存じます。御經文などの説に從つて菩薩と申し上げ奉る方が宜しいかと思はれます。

かくて菩薩は菩提樹の下に達せられました。菩提樹とは佛成正覺の後、に名けられたもので、實は畢鉢羅樹といふのであります。莖と幹とは黃白にして、枝と葉は青翠極寒の季にも凋むことなく、盛夏の節も色鮮である。過去莊嚴劫の諸佛も、現在賢劫の諸佛も、皆この畢鉢羅樹下に端坐して金剛定に入り、無上菩提を證得し、正覺を成就せられると云ふ所から、この畢

鉢羅樹を菩提樹と名けました。また三世の諸佛がみなこの菩提樹下の金剛座上に安坐して、大悟證得せられたところの靈場であるから、この菩提樹下を指して道場とも申すのであります。

菩薩が徐々とその菩提樹下に歩みを御進めになると、森に連なる樹々の枝は自然に垂れ籠めて御身の蔭となり、河邊に咲き満つる蓮花は妙なる薫を風に送りました。茂森に潜む獸類から青空に翔る鳥類までも、菩薩の光臨を喜ぶかの様に微妙の音聲を發しました。

この時菩薩は、過去の諸佛は何物を敷いて座となし、無上道を成じたまへるかと思惟し、諸佛は皆淨草を以て座となし、正覺を成し給ふと思し召され。今は誰ありてこれを施すものありやと觀念し、四方を見廻はし遊ばされた。時に天帝釋が自ら香醉山に行き、吉祥草を刈り取り、束ねて一把となし、これを持つて菩薩の前に來り顯はれました。紺青の色が孔雀の羽と

も見まがふ吉祥草は、兜縷綿の様な柔かみを持つて居ました。菩薩は御尋ね遊ばされた。汝の名は何といふかと、其人は吉祥と答へました。汝の持つる物は何であるかと御尋ねになると、之は吉祥草と御答へ申上げました。菩薩はこれを聞いて大いに御歡びになつて、我今諸の不吉衆惡を截斷して以て最吉祥を成就し、復た一切衆生をして同じく吉祥を得せしめんと欲す。この時に當り吉祥の人我が前に顯れ、而も吉祥草を持ち來る。我れ今定て阿耨多羅三藐三菩提を證することを得んと、菩薩は其幸先多きに御満足あらせられ、汝が手中に持つる吉祥草を以て、我に施し與ふるや否やと御尋ねになりました。其の人敬諾して、菩薩よ無上不退の大道を成就したまはん時は願くは慈悲を垂れて先づ我を濟度したまへと申し上げ、此吉祥草を奉獻致しました。菩薩これを受けて、金剛座に昇り、この吉祥草を敷いて座と爲し、面は正しく東に向つて過去諸佛の成正覺の法の如く、正身

端坐結跏趺坐して、正覺を成ぜずんば此座を起たずと誓はせられた。

「我若し無上菩提を證せずんば寧ろ此身を碎くとも、終に此座を起たずと大誓願を發して直に坐禪入定せられました。天龍八部三界六道の群類までが、不退菩提の光明に觸れて大歡喜の心を起しました。東西南北四維上下の國土の諸の菩薩聖衆は、俱に此菩提場に來りて道場を莊嚴し、菩薩を供養し互に偈頌を説いて、今この菩薩が過去無數劫の間、布施持戒忍辱精進禪定智慧等の六度の善法を修習満足して、將に最正覺を成就せられんとするを讚歎しました。

菩薩は今始めて此の人間界へ御生れになつた譯では無い。生れ變り死に變り娑婆に往來する事を八千度も繰り返へされて、其の間に難行苦行積功累徳して六種波羅密を満足せられたのであると、御經文には明に説示せられてあるのです。人間は僅かの富を積み少し許りの學藝を修むにさ



へも尋常一様の努力では成功するものではない。まして大事業の大成功に至つては、年代を累ね子孫に傳へて終始一貫してこそ、始めて其理想目的を完成せられると云ふものです。佛陀御一代の性行閱歴を以て、之を御一生の前半に於て完成圓滿せられたものと解釋する事はどうしても出来ぬのです。法華經如來壽量品に御説き被下ました佛壽無量阿僧祇常在娑婆の御誓願が此菩提樹下の端坐に於て今や發現せられんとするのであります。





第八節 金剛座上の降魔

菩提樹下の金剛座上に結跏趺坐して大寂定に入らせられた菩薩は、心の動搖識浪の昇沈等、幾百千萬の悪魔波旬に幾度か包圍攻撃を受けられたか分りません。

菩薩はこの一切の天魔波旬を悉く降伏し、諸天衆をして我が自在遊戯神通を見て菩提心を發すことを得せしめんと觀念し、眉間の白毫相好より降伏魔怨の光明を放ち、普く三千大千の佛國土を照されました。一切の魔宮殿其光りに打たれて魔王の驚愕は一通りでは無い。开は由々しき大事である。今菩薩信力堅固にして功を積み徳を累ねたる上は、遠からずして正覺を成ずるであらう。然れば必ず大法輪を轉じ一切衆生を利益して、佛法世に行はるゝに至らむ。さうなつて來ると我が眷屬は彼がために困

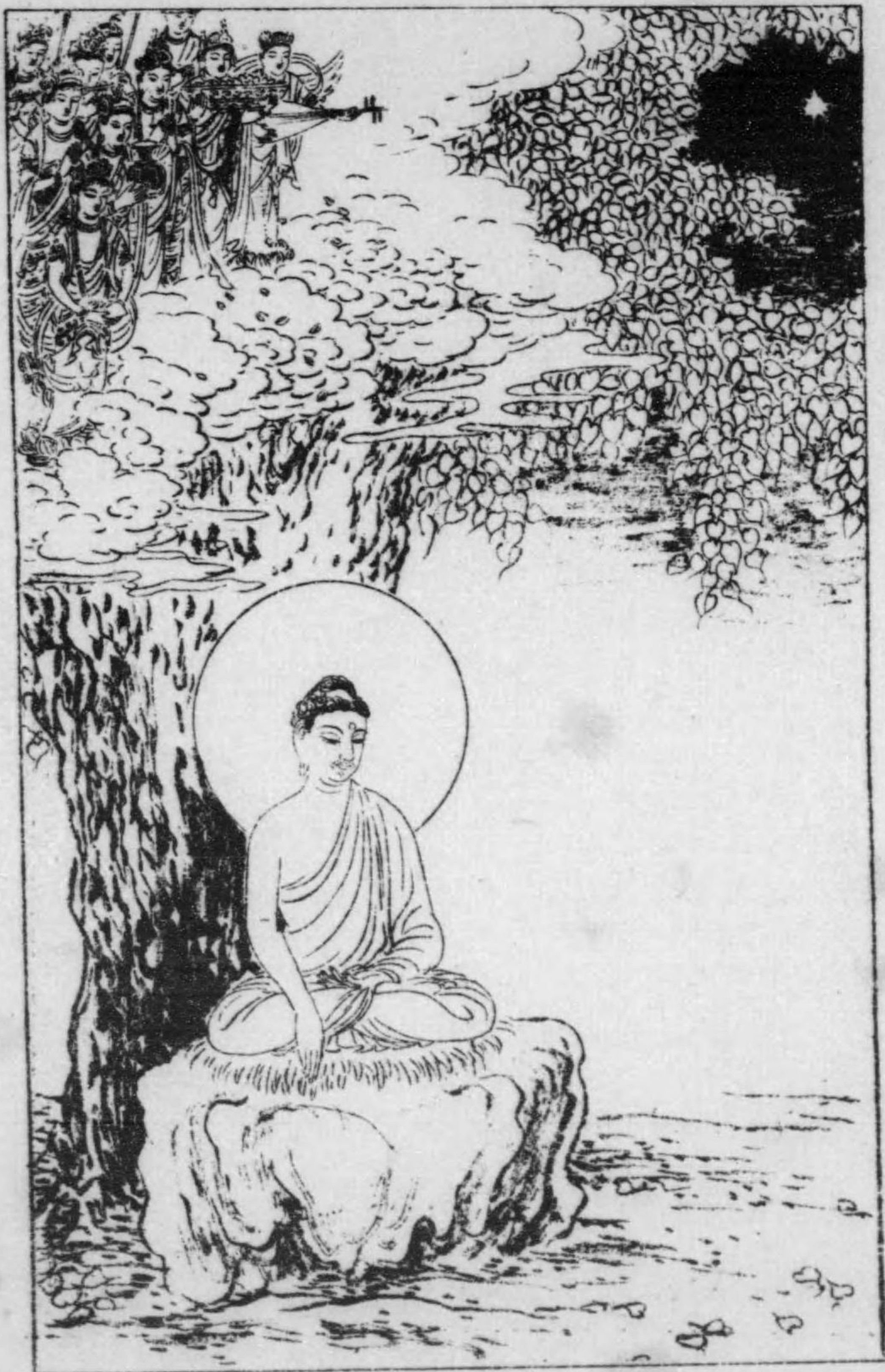
められ、正善の力が天下を支配するに至り、魔道は遂に破壊せられんと憂ひました。外に分別の法もありませんから、諸の眷屬を集めて、菩薩の道心を挫き破るの計略を評議する事になつた。魔の徒衆は前に進み魔王を諫めていふやう、菩薩は清淨にして三界を超出す。神通智慧明了せざるなく、天龍八部に至るまで皆歸依して咸く共に稱讚して居る。此れ大王の能く摧き屈する所で無い。なまじいに事を起して自ら禍咎を招くにも當らぬと言ひました。が、魔王はその諫言を聽き入れません。自ら左手に強弓を把り、右手に五箭を持つて、畢鉢羅樹下なる金剛寶坐の前に降り、菩薩にうち向ひ、汝は是れ刹帝利種にして世にも尊貴なるにあらずや、何ぞ此に坐して苦死することを要せん。汝宜しく速に出家の法を捨て、轉輪王の業を修め、上天の樂を得べし。これ第一の勝道ならん。汝國王の種族を以て乞士と爲るはその所應にあらざるべし。汝若し我が言を用ひざれば、我れこの

強弓を以て汝を射ん。我れ一たびこの利箭を放てば、如何なる苦行の仙人も響きを聞いて恐怖し、昏迷して性を失ふ。況や汝瞿曇能く此毒箭を受くるに堪へんや。汝速に起ち去つて安全を得よ。速に起て速に去れと迫りました。菩薩は泰然自若として少しも動念恐怖せられませぬ。魔王は皆を裂き齒嚙みして弓を挽き箭を放ちました。が、不思議にも箭は空中に停まりて落ちず、鏃は下に向つて蓮花と變じた。魔王この異常の相を見て更に餘の方便を以て菩薩の道念を妨げんと思ひ立ち、魔宮に還りて頻りに惡策を案出せんとした。が、魔王の三女に、一は欲染、二は至悦、三は可愛樂といふのがあつて、何れも極めて艶麗美好、巧みに媚びて能く人を惑はすに秀で、居た。父魔王が憂愁の色に沈んで居るのを見て、其故を問ひ、父魔王の憂悶を解かんと三女齊しくこれを慰め、父王憂ひたまふことなかれ、妾等三人下界に下り、淫欲を以てその戒行を妨げんと言ひました。魔王大い

に悦びそれこそ上々策である。急ぎ菩薩を盡惑せよと命ずれば、三女は臙脂濃装進んで金剛座邊に至り、綺語妖姿、百方菩薩の情を促さんと試みた。眉を揚げて笑を含み裳を褰げて前に進み互に相見て相戯れ膝を露はし胸を開き、時に抱き合せて卑猥の状態を爲し、有らん限りの術を盡しました。たが菩薩は定心清澄にして明珠の瑕玼なきが如く、日の始めて出て、天下を照が如く、蓮華の淤泥にありて染着する所なきが如く、須彌山の移動すべからざるが如く、六根寂定其心澹泊にして増損する所がありません。三女も詮方盡きて願くは晨夜起臥親しく左右に侍りて給仕することを許したまへと言ひました。菩薩これに答へて汝等は昔小善を植えて天上の身を得たのであるが、世の無常を念はずして此媚態をつくらうて居る。形體は美麗でも心は端正で無い。淫惡不善自ら其本を亡ぼす、死して當に三惡道中に墮つるの外は無い。今汝等故らに來て人の善意を亂さんとす。

る等は以ての外である。譬へば革囊に臭穢を盛る様な不淨なものに、何の染着すべき所があらうぞ、去れ再び來る事勿れと仰せになりますと、花の如き三女の顔は朝日に逢うた霜の如く忽ちに消えて、醜惡なる老婆の姿となり面皺み腰屈みました。三女は互に顔を見合せて大いに驚き、狼狽して魔宮に逃げ還り、魔王に面してこのことを告げたものですから、魔王の憤りは絶頂に達しました。瞋り吼ゆる聲は雷の如く、諸の夜叉眷屬一切の魔軍に號令して、汝等速に宜く諸の岩石を擧げ、弓箭、又劍、斧、鉞、矛、盾、鈎、戟、種々の兵杖兇器を以て、行て菩薩を撃碎すべしと、毒龍を喚び黒雲を起し、虚空暗澹十方に馳せ狂へる魔屬の狀況頭は牛の如く、牙は利刀に似て、身の肥大なる者あり、一面三眼にして口より焰を吐く者あり、或は三頭六臂有つて手毎に弓箭、刀鎗、戈戟を把るもあり、或は潤面一眼にして口は血盆の如きもあり、滿身に針の如き毛を生ずるあり、丈高く腹大にして鎌の如き

爪を生ぜるあり。かくの如き惡類異形、無量無數菩薩の身邊を圍繞して、大惡聲を發し、天地を震動し、各々威力を盡し、菩薩を摧破せんと試みました。菩薩は慈悲圓滿、心意泰然として、更に怨恨の顔なく、又恐怖の念なく、獅子の群鹿の中に居るが如くにして、この魔軍を見ること小兒の戯れを見るが如く、大慈大悲の御眼を舉げて、此等の惡魔を御覽になりました。張り合ひが抜け力を失つたものは、魔軍である。石を抱く者は、舉ぐることも能はず。刀を飛ばし、劔を舞はせば、空中に停まり、雷を震ひ、火を雨せば、五色の華となり、惡龍毒を吐くも、變じて香風となる。丈であつた。是に於て、魔王波旬も威勢頓に衰へて、傲慢を捨て、怖畏を生じ、悉く戰鬥の具を打ち棄て、發露懺悔し、十指の掌を合せて、菩薩の足を禮し、此聖者必ず正覺を成就し給ふべしと言つて、恭敬讚歎いたしました。是れが即ち菩薩の惡魔を降伏せられた相であります。





第九節 臘月八日の成道

幾千萬の天魔波旬、夜叉羅刹が退き去つた後は、天地を震動せる百雷は、一時に鳴りを静めた様であつた。降りしきる煩惱の雨は洗つた如くに霽れ、吹き荒んだ妄執の風は忘れたやうに熄んで、菩薩の心地は廓然洞豁、一切無礙の智眼を以て、残る隈なく法界を觀ぜられた。大千、中千、小千と互に連る世界の有様恒河の沙數も音ならぬ更に三世を通觀すれば、千生、萬生、無量生成、劫住、劫壞、劫空、劫と轉變輪廻の際限は無い。一切世間の衆生等は此に死しては彼に生じ、貴賤、勝劣、強弱、貧富、智愚、利鈍、壽命の長短、所生の善惡と云つた様に、宇宙人生の狀況は皆悉く菩薩の心鏡に映出しました。

菩薩この時念じたまふやう、一切衆生、生老病死、險惡趣中に住して、而かも覺悟すること能はず、云何が彼等をして憂悲苦惱の邊際を知らしむる

ことを得ん。生老病死の苦の本を絶滅するには、生老病死の縁りて起る所の本源を見出し、それを斷滅したならば其結果たる生老病死の苦は自然に消失すべきである。あらゆる事物は因果の理法を離るべきもので無いと悟徹せられた菩薩は先づ一切衆生は何の因縁を以て生老死ありやと觀じ逆に十二の因縁を觀ぜられた。即ち知る老死は生を以て根本とする事を、若し生を離る時は、即ち老死あるの理なし。この生は天より生ずるにあらざ地より生ずるにあらざ、無縁より生ずるにあらざ、すなはち因縁より生ずるものなり。然れば老死は生あるによりて生じ、生は有あるによりて生じ、有は取の存するに由りて生じ、取は愛より生じ、愛は受より生じ、受は觸より生じ、觸は六入より生じ、六入は名色より生じ、名色は識より生じ、識は行より生じ、行は無明の存するによりて生じ、更に順に之を觀察して生老病死の苦の本源は無明實にこれが初めを爲し、無明より色相起り、色

相より意識起り、意識ありてこゝに嗜欲起り、嗜欲によりて繫縛起り、繫縛は轉化を來たし、轉化は生を來たし、生あれば即ち老あり、死あり、憂愁あり、痛歎あり、絶望あり、一切の苦痛は是に於て起る。若し最初の原因をその根底より斷絶すれば、これによりて一切の結果を斷滅することを得るの理なり。このゆゑに無明滅するときは行滅し、行滅すれば識滅し、識滅すれば名色滅し、名色滅すれば六入滅し、六入滅すれば觸滅し、觸滅すれば受滅し、受滅すれば愛滅し、愛滅すれば取滅し、取滅すれば有滅し、有滅すれば生滅し、生滅すれば老死憂悲苦惱悉く滅却すと、事細かに生死の妄執を斷絶すべき縦横順逆の觀法を成就せられたのであつた。

外道の諸仙は、人世を實の如くに知らずして、或は我より生じ來れりと爲し、或は自性より出で來れりと爲し、或は又因果の道理を撥無して、今生の如何によらずして死後必ず空に歸すると信ずる斷見あり、或は永久の

存續を信ずる常見もある。これ等は要するに十二因縁の道理を知らざるからである。今やこの理を悟りて三世を洞觀し給へる菩薩の境界は、心眼朗々として一點の塵埃をも存しません。五天を震撼して教化を未來永劫に傳ふべき法門の根本義は斯くして菩薩の胸臆方寸から發現せられたのであります。

かくて臘月七日の夜は沈々と更け行きました。黒布にもまがふ夜半の影は刻一刻と薄らいで、八日の朝暎今將に朦朧の幕を破らんとする東天に、明皎々たる明星が輝き初めた。刹那菩薩は大悟現成の獅子吼あらせられた。其御言葉に「我與大地有情同時成道」と傳へられて居るのであります。すが、這箇の消息は元より御經文にもあります通り、唯獨自明了餘人所不見て、本より我々凡夫が思惟憶測して、其を度量すべきではありません。是に於て十方法界の土地草木牆壁瓦礫に至るまで皆佛事を爲し、有情非情

も悉く佛化に冥資せらるゝ事となりまして、過去の諸佛の記前に従つて今より釋迦牟尼佛と號し上るのであります。時に天樂自然に鳴りて妙音を發し、香風徐かに起り、瑞雲虚空に満ちて甘露を降し、園林花開いて地上は悅樂莊嚴の淨刹を現じ、諸天は天の伎樂を奏し、華を散じ香を燒き、寶蓋を執り幢幡を以て虚空に満ち、佛陀を供養し奉りました。その時に當つて、一切衆生皆慈悲の心を起し、瞋恚の想なく怖畏の情なく、また憍慢慳嫉誑誑の心なく、地獄の苦痛も暫く休息することを得、畜生の相噉むものも惡心なく、餓鬼も飽満して飢渴なく、世界の中幽冥の處、日月威光の照す能はざる所も而かも皆大いに明かに、其中の衆生悉く相見ることを得たと云ふ事である。これ等各々相共に佛陀を瞻仰して、大聖法王世に出興し給ふ、三界の有情は今こそ其所歸を得た、暗黒の人生も今こそ其光明に觸れる事が出来たと云つて、異口同音に成等正覺の佛徳を讚歎し、魔界の群類ま



でも皆恭敬供養し奉るに至りました。佛敎の目的は自覺々他覺行圓滿に在るのです。佛陀は今この菩提樹下に於て無上正徧智を開發せられて、自利向上の大目的を達せられました。更に進んで利他の本願を満足すべき、大努力を要すべき機會に逢着せられました。御經文の中には「我所得智慧微妙最第一」と御説きになつてあります。是の最第一なる佛力佛智も之が方便門となり向下門となつて下衆生の利益を顯はすに至らなければ、佛陀の御誓願は決して満足の解決を告げられたものとは思はれません。絶對無上の大道を證得あらせられた佛陀も之が爲に後半の御一生を凡愚の衆生と如同して、和光同塵の御辛勞を厭はせられなかつたのであります。





### 第三章 我 篇

#### 第一節 本願方便の應世

菩提樹下に無上正覺を成就して出世の本懐を満足あらせられた釋迦牟尼佛は、一切漏盡心境豁然旭日の初めて昇るが如く、蓮華の初めて蕾を破るが如く、獨り自ら解脱の法樂を享受あらせられました。已にして自ら思惟したまふやう、吾が所證の法門は其理甚だ深くして解し難く説き難し、唯佛と佛とのみ乃ち能く之を知る。一切衆生は五濁の世に在りて、貪欲瞋恚愚癡等のために覆はれ、薄福鈍根にして智慧あることなし。今吾れ若し法輪を轉じて微妙の理を説くといへども、諸の衆生は之を信受するのと能はず、却つて正法を誹謗し惡道に墮ちて苦を受くるに至らん。我れ寧ろ默然として涅槃に入るべきか。而かもまた願みれば、我れ本と妻子を捨

て王位を抛ち、幾年不斷の勤行を勵みしは、一身の法樂を享受せんがためならず、一に衆生のために解脱の大道を開かんとするの慈悲心より出づる所なり。今法を説かずして涅槃に入らば、久遠劫來の本願に背き、顛倒妄想の衆生を濟度すること能はざるを如何せんと念ぜられた。其の時大梵天王は壯士の臂を屈伸するが如く、忽ち佛陀の前に現はれまして、頭面禮足し、跪いて掌を合せ、佛に向つて白しました。世尊昔衆生の爲の故に久しく生死に往來し、身命を捨て、以て布施し、備さに諸苦を受けて、廣く徳本を修し、今は所願満足して無上道を成じ給ふ、云何ぞ默然として説法したまはざるや。衆生長夜生死に沈溺し、無明の暗黒裏に墮ちて出期あることなし。然れども過去世に於て善友に親近し、諸の徳本を植ゑて法を聞きたるため、今聖道を受くるに堪へたる衆生あり。唯願くば世尊此等の爲の故に大悲力を以て妙法輪を轉じたまへと勸請し、釋提桓因乃至他化自在天

も亦復是の如く、三たび其の轉法輪の方便を勸請致しました。佛陀は默然として之を受け説法することを許し給ひ、これ等の諸神は已後佛法護持の善神となるべき誓を立てたのであります。

世尊は梵王等の請を受け已り、佛眼を以て諸の衆生の上中下の機根を観察し、更に思惟したまふには、我今甚深の妙法を説くに當り、誰か最も先きに聞くことを得るか。仙人の阿羅邏迦蘭は聰慧にして悟り易いであらう。又彼は先きに發願して成道の後は第一に我を度せよと言つた。又鬱陀羅摩仙人は利根である、彼等こそ先に法を聞くに堪へた者であると、佛眼を以て御覽になりますと、彼等二仙は果報つたなくして何れも昨夜命終したことを御知りになつた。又更に思惟し給ふには、我曾て山に入り道を學んだとき、父王の命を奉じて給侍の勞を厭はなかつた。憍陳如等は聰明利根であつた。先づ彼等五人のために法輪を轉じ、これを濟度せんとこゝ

に始めて波羅奈斯國なる鹿野苑へ向はせらるゝ事となつた。佛陀が成道の後三七日中菩提樹下を起たずして、海印三昧に入らせられ、威神力の故に七處九會に説き出だされた所の法門は、これを大方廣佛華嚴經といふのであります。

かくて佛陀は道場を起つて山を出て、路に差梨尼迦と稱する樹林を過ぎさせられた。其の時會々北天竺より來れる五百の商人があつて、其主たるものに帝梨富婆跋梨迦といふ二商主があつた。五百輛の牛車に種々の貨物を載せて曠野を過ぎつゝあつたが、時に天神が現はれてこの二商主に告げていふ様、如來應供、正遍知、明行、足善、逝世間解、無上士、調御丈夫、天人、師、佛、世尊あり世に出興し給ふ、これ最上の福田なり。汝今他人に先んじて宜しく最初の供養を設くべしと。二商主はこの天語を聞きまして、善哉告げの如くに供養したてまつらむ。世尊は今何れの處に在したまふやと問

ひました。天神報じて世尊は久しからずして當に此に來り給ふべしと、やがて佛陀は威容堂堂として諸天に前後を擁せられ、差梨尼迦の樹木を出でさせられた。二商主は大いに歡喜を生じ、佛を仰いて蜜麩を供養し奉り、佛は鉢を以て之を御受けになり且つ咒願せられた。今布施する所食せしめんと欲する者氣力充つることを得て安樂無病年壽を保たん、飲食の布施は三毒の根を斷じ、將來當に聰明智慧を獲て篤く佛法を信ぜん、在々處々生ずる所正見味からず、現世の中父母妻子親戚眷屬皆悉く熾盛にして、諸の災怪不吉の事なからん若し命過ぎて惡道に墮つる者あれば、今施す所の福を以つて還つて人天に生ぜしむべしと、食し已りて鉢を洗ひ口を漱ぎ、彼等をして佛と法とに歸依せしめられた。

世尊は商主と別れて鵝王の如く象王の如く、道體巍々として前行せられました。途に一人の外道優波迦と云ふものが佛陀の相好端嚴にして諸